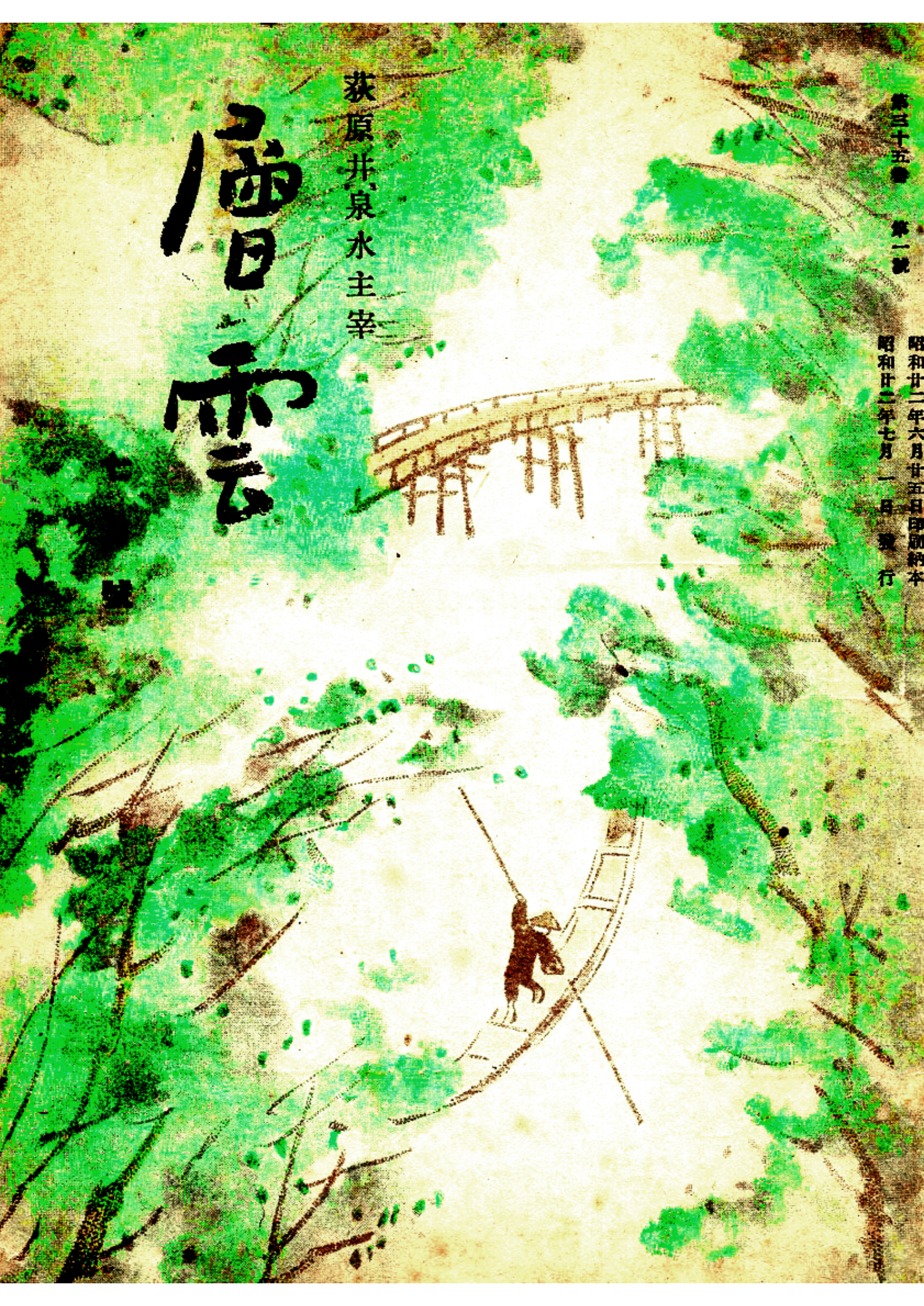


萩原井泉水主宰

瀑布



荻原井泉水自筆句集

(和紙和綴大型桐箱入箱書付)

月明帖 月光帖 鴨川帖

大冬帖 淺春帖 (各五百圓)

京洛春秋 井泉水隨筆

京都の案内・探訪記・定價送共十八圓

現代俳句叢書

日野草城句集 春 十五圓

岩田 潔句集 女郎花 十五圓

長谷川素遊集 定本句集 十五圓

池内友次郎集 關布まて 十五圓

石田波郷句集 風 切 廿五圓

橋本多佳子集 信 濃 廿五圓

(分買自由・セロハン原紙使用・送費各三圓)

發行 白井書房

京都市京大北門前
振替京都九二二番

層 雲

昭和22年7月

第35卷第1號 (通卷406號)

若葉のころ

花が散つてしまつてから咲き出る花のうつくしき……
私はかう云ひたい。「うめ」「もも」「さくら」、それらの春の花を代表してゐる花は、いかにも花やかであるが、これ見よがしに咲きほこる感じが、ほこらしげである。又、花を見に出る人の群がほこりを立てるので、そんな花の場所には行きたくないと思ふ。

さくらさいたればうちにある

餘 干 郎

此の句のやうに、花の頃は、その花をたゞ、うらゝな。氣の中に感じてゐる方がよい。さて、それらの「もも」や「さくら」が散つて、木の枝が若葉になるころはじめて咲き出してくる花は「やまぎき」である。「つじ」である。「ふじ」である。これらの花は山、木の間にかくれたり、又は陸の木かげにつつましく咲き出すのだ。これ見よがしの氣持はさらにない。で、こちらから其を見出して、おつ、こつに「ふじ」がある、「つじ」がある、といふ風に、自分が見出したことに微笑を感じる。そうして、足をとめて、しみんと其のうつくしきに見ほれる氣になる。私の家には、いま「つじ」が咲き出してゐる。門をはいつたところに三株、それは赤と白、書齋の窓の外に二株、それはうすむらさき。それらが光と影との調子をふかめてきた梅の若葉のみどりに照りはえて、一きわうつくしい。かつて住んでゐた光明寺にもつじがあつた。京都の橋畔亭も今ごろはつじが美しからう。そこには今、どんな人が住んでゐるだらうか、と思ふ——

つじにししようじ白くして今住む人か

かういふ感懐である。——「灌師のころ祭のころ、若葉の梢すゞしげにしげり行く程こそ、世のうはれも人の戀しさもまされと、人の仰せられしこゝ、げにきるものなれ」と兼好法師の書いてゐる氣持は、私にもよくうなづかれるのである。

(二二・五・一五)

井 泉 水

標語 二題

荻原井泉水

小言

Do what you like!

市川三喜博士は、一高時代からの同窓であるが、さきごろ、私の隨筆冊子を送つてあげたところ、その中の「生活自由律」といふ一文には同感であること云つて、返事をよこされた中に——君が英國留學中、私淑してゐたロンドン大學の英文教授クエア博士は、學生に與へる言葉として

Do what you like. Know what you like! を示してゐた。此の標語は今もよくよくしてゐる君は云ふ。——「汝が好むところのものを爲せ、君が好むところを知れ」とは東洋風の心境ではあるが、けつきよく、人間心理の眞實である。人間には必ず其人にむいたものがある、何が自分に向いてゐるかさういふことを知つて、それを自分の仕事にするがよい。それは其人の自然であるから、しぜん仕事としての能率があがる。さうして、さういふ仕事をするこゝによつて、其人は自由に生きるといふこゝの生き甲斐をも感ずるのである。

Find every thing smiling

成田の女學校に招かれて、一席の講演をした。その學校の廊下には——「Keep smiling!」と書いて貼つてあつた。校長は、これが學生の標語ですと説明した。なるほゞ、女としては「いつも微笑をたへて——」といふ心持はかんじんなことである。私は、俳句の談をしたのだが、俳句の心といふものは、つまり、微笑の心である。垣根のすそにほそぼそと咲いてゐる「なづな」の花にも、よく目をさめて見れば微笑が見出されるではないか。旅の宿で「のみ」や「しらみ」にせめられながら、そこに微笑を感じたのが芭蕉ではなかつたか。物心心は、鏡に我とのやうなものだ。自分の心に微笑があれば、どんな物も微笑を以て迎へよう。そして、どんな物にも微笑を見出すことに依つて自分の心が明るくなるのである。で、私は此の學校の標語に、もう一行の言葉を付け加へたい。即ち——

Keep smiling, and find everything smiling!

かう話したのである。

(二二・五・一五)

人は老を感ずると共に、目に見えて月々に少くなつてゆく髮の毛の、一筋をも、貴いものに感ずるけれども、目には見えなくても、日に日に少くなつて行く時間の貴さには、いつごろに無頓着なものである。

× 物事は、上から加へたものではなく、下からこぼる熱といふものが、いかにかんじんなものかといふことは、火鉢に炭火をおこしてみればよく解る。

× 自分のあたまの中は、どうにも改造が出来ないゆえに、女は髮の毛に新味を見せようとして苦心する。

× しばらく會はなかつた婦人に向つて、卒直に「あなたもずいぶん年をとりましたね」と云へば、其人はきつとおこつてしまふ。その時、「お子さんはずいぶん大きくおなりになつたでせうね」と云へば、大それたことばれる。意味はまったく同じことである。しかも、結果は大へんな違ひである。

——井泉水——

水郷春景

萩原井泉水

○酒々井、萬屋にて

水郷春景といふべき大きな食卓のあちこちに坐りぬまを遠く見せてふなをたべさせる昔の二階ではある春もおわりの好い日和の君たちと子もちぶなのはし寄せといはるる蛙鳴いてるちよつと寄つて、おくさん

○印幡沼に舟をうかべて

蘆はすいすい水草でんてん筑波が見えて芋鏡子になるそれが、さぎの飛びゆく方が圖志にある花嶋山遠い蛙と一二軒は見えたものの漕ぎへだたる春の日まつたいらなばんが水をひからして立つ日をつつむ雲と水の光のくもりゆく春の日さぎの立ちて飛びもせぬ棹さして日の永さです松のかすみへ漕ぎよせてきて水神の松水に松のうららなる漕ぎちかづきつつえがく此の子大松の根に石つみて遊びほれてゐる漕ぎよせて松のすがた春行くとおもふ漕ぎさかり行く棹だけで遠く来てゐるこぎもただけでよしの青みゆきよしきりの鳴きだしそうな水と空春すこし風たちてくる棹で来る棹で行く

添へ書

千葉縣下へ三四日の旅をした。印幡沼のほとり、酒々井といふ町に相京晴樹がゐる。晴樹は市川まで私を迎へに来て、迎立つた。一日は、かれの家に小やすみしてから、成田に行つて宿をとり、翌日、あらためて又、酒々井へ来て、昔からある川魚料理の家で、ウナギだのフナだのをあじわつて、それから沼へ舟をうかべた。

五月とは云へ、ことしはウルウがあつた爲にまだ三月の霰箆だといふ、春日れいろうといふ感じの日和で、水上にはさぎなみ一つ立たず、川魚をすなごる底の浅い小舟に棹をさして、水上散歩といった風な半日をたのしんだ。

印幡沼では、釣はダメだといふ。たぶん魚がしげんと食に足りてゐるからへたな餌をかへりみなのだらうといふ。ケッコウなところだ。で、その魚を食とするサギ、ペン、カイツブリなどいふ鳥が澤山にゐて、平板な水上の風音に繪画的の點綴をしてゐる。いかにも小川芋鏡子の畫材になりそうなどころだ。私も何枚かのスケッチをした。

改卷提言

井 泉 水

第一に、曆發社が今月から京都に移ることになつた。第二に、曆發は本號から俊二が全面的に經營することになつた。これだと思ふ。そこで、此の第一と第二と、その何れが主であり、何れが従であるかといふに、それは、俊二が經營するといふことが主である。俊二が主としてやる爲には、東京よりも京都の方が便宜だからといふことなのである。實を云ふと、今まで發行者としての署名人は私にちがひないが、私は印刷所と直接に連絡したこともなし、配給會社と連絡したこともない。すべて、俊二の裁量に依つて、今月は何部印刷して、何部を配給會社にまわしたといふ風な報告を受けてゐたのだし、曆發の會員も、句讀を出される人は私と連絡があるけれども、其他の多數の方は、その名鑑カードを保管してゐる俊二にまかなければ、私にはアドレスが解らない。そのやうに、發は實、俊二がしてゐたやうなもので、私は必要のある時にハンコをおすと、いふ條の經營者たる觀があつた。それを今度は、形式も實際も共に俊二に、といふことに直したのである。俊二としても、名と實と共に自分が之を買うてやるとすれば、一そう骨を折つてやる氣持に

麗日壇

井 泉 水 選

住居のひろき櫻があつて櫻あるとき
山までの夕暮がたゝるんでゐる電線
道へ出て通つてゆく蝶々
すつかり春がもう花びらばかりちらばつてゐる
雨戸をあけて泊めて貰つた朝となる
松へ雨が上つて川音晴れてゐる
小鳥 雪に晴れてゐる障子のそと
流れおとのするうめのはな
白梅 しろくがく青くぬれてゐる
山の朝は梅の咲く二三軒起きてゐる
梅のさきみもてる 働いてゐる
幹に梅の二三りんひらき日に向き
二階から手をたたき 御明り
花びらが浮くわが肩にひざに湯をかける
時雨の湯といふ子をつれてちさい下駄
船に繩をなつてゐる 訪ねる
露に火を焚いて燦けたはがき 差しのはがき
桑の根つこが家のぐるり風が春

芹田風車

秋山秋紅蓼

内島北明

(句壇即席)

もならうし、私としても、たとひ形式の上だけの煩ひでも、その煩ひから解放されれば、肩が軽くなつた氣持がほがらかさを感じるのである。

雑誌の編集にしても經營にしても、若い者でなければいけない。これは、かなり精力を要する仕事であるからだ。又、新しい時代に對する感覺にしても新しい企畫の創意にしても、若い者でなければいけない。そして若い者がその若い情性と奮闘とをじょうぶんに發揮して行くために、年寄りになるべく其のジヤマにならぬやうにした方がいい。こゝにいふ意味で、在來のやうに私が附録の名義人であれば、後二も自分一人の考ばかりで凡て切りまわすわけにも行かなかつた。そこにキウクツがあつた。そうしたキウクツが、今度から除かれたことになるのだから、後二としては、十二分にその手腕をのびすことが出来る筈だとおもふ。これは附録のために大それたことである。

で、私は、此の改卷號の編集方法も、すつかり在來の型をはなれて、何か後二風の新味を出してもらひたいと期待してゐたのだが、出来上つたところは、その體裁の上では前號とたいしてかわりはないかもしれない。もつとも、總ページ數が三十二頁であつて、其中に俳句が廿八頁を占めるとすれば、その俳句欄の組み方に多少の工夫を試みるといふ位がセキノヤマで、かくべつ内容的に新しい編集ぶりをする

お針子の背巾ならぬて庭には梅がむせつほく咲く
人形とその書と笑つてゐてアトリ日ざしが春
叛くと見せて叛き得ぬ子の心を知つてゐる春の夜
眼鏡がいるようになつた元日の眼鏡を拭く
新年の人通りが渡し場へつづいてゆく見わたし
傘さして雨が芽ぶく

小澤武二
渡邊さとし

女はうつむきながらに芽ぶくにはまだ遠い林の中の徑
その向ふ海、から昇る月をボプラのひらひらする
カンナが眞赤な別れ話の別れかねてゐる
月見草へ唄けはなちびを掻いてゐる
とけても泣かない子と落ちてる椿とあたたかい
春は稽古の鼓の音も松の木に三日月か
酔の物白いうちの味春の夜はふけてやけらかい
影もうちの庭木の枝ぶりのけさもうぐひす
土の蕨も夏になる植えてゆくトマトの間隔
枯葉、月のどろかある月が水を閉るうしてゐる
一つの灯が水たまりに落ちて落ちてゐる、ふゆ
枯葉、水の上の月夜に船が寝てゐる
壺餉にして枯葉刈り舟でまてゐる
冬木にけふは新月があるといふ風呂の加減はどうかといふ
馬糞通つたあとのそりあとにあき空のいろつづつてゆく
枝からさえづるのが枝へとんでまたこたゆきがふる
たんぼのほとり春になるお天氣になる
林の中の一つの灯が早春といふ夜明け
くららうちにあいてうめ日のさしてゐる

林木衣樓
池原魚眠洞

船木月々虹

餘地はないのだから、前號と大してかわらないといふことも當然のことであらう。その上、「層雲」式の編集ぶりといふと、一つの「型」とも見られようが、その「式」といふものに層雲人はアトホームの親しい感じをもつてゐるのだから、徒らに目先をかえてゆくことは好ましくないと氣持もあらうで、全く後二の平になつた改修號としては、尙覽のやうなこれが先づ甚だオンケンな編集ぶりだと云つてよからう。

後二の云ふところでは、此のころ、投句が非常に多く、私の稿もしたがつて多いので、その收容方法に苦心するといふことである。作としてすぐれてゐる作品は、澤山出したといふことは、勿論だが、少數の人の爲に紙面をとられて、多數の人がキツクツを感ずるといふのでも困る。さりとて、民主主義のはきちがえのやうに、みんな平等に取扱ふといふのでは、藝術的の精選にはならない。こゝが編集上の苦心を要するところだ。世間の俳句雑誌を見ると經營第一といふ感前から、社會的地位のある人をカンメンに押し立て、その作品を特別扱ひしてゐるかとおもふ點があつたり、或る雑誌の選句は、一つところに同じ役所の頭ぶれが並んでゐて、それが官等順に並んでゐるといふ評判のあつたこともあるが、これはあまりにも政治的であらう。何事にも大乗的の行き方があり、小乗的の行き方がある。俳句

孤獨、月より、白い、障子にゐる
訪ねて、久しぶりの月を顔に
夜に出た月をこどもをたく
日のさす山に入つてゆく
うしろ道まへ道月の夜
木のなかのゆきが教會堂のうら泉へいく
雲よ日がおちたところまで日がくれる
流木にヒヨイとからす波が日をうしなつて
かたいつぼみの、枝のシャツは日のあるうちとる
おとりかごもつた子と二三人と春あさい岬の道
春夜の梅の小さな花にあふれるほどのしべの幸福
瓦屋根の向ううす赤い桃が咲いてひるから樂園が練習
わらびとつて登つてきて頂上であるその上のお日さま
春は日ながくて、墓地を通つてきて交番のあるその邊
町はづれの石屋の破れ障子の前を流れてゐる水
泊めてはもらへる火のない火鉢に通されてゐる
港町のどの家もさむい雨がふつてゐる 宿屋
風にちぎれる小便す
火鉢におのが手紙をゆつくり讀む間がある寝て
うまい話にかしてゐた耳をかぜ吹く
車摘でも出来さうな線路工夫が足をなげ出してゐる
ペンキぬりをして居る男がどこも平和な色にぬりつゝぶしてゐる
この輕便の小さい汽關車のせい一はらの汽笛が西の吹く吹きさらして
果樹園に家が一つと池が一つ、と凍つてゐる
箱がとけて通る人のうつる水田の先の踏切

近木黎々火

松尾敦之

三好草一

田中井夢

吉澤新市

の道では、大乗的の考へ方を必要だし、時には小乗的の行き方も必要だとおもふ。そのところは、俊二のハラ一つでやつてもらひたいところだ。會員から編集部へ希望や試案を申し入れて下さることはのぞましい。多くの人の考をあつめて「みんなの層雲である」といふ氣持の好い層雲を作つてゆくこと、これこそホントウの民主的といふことであらう。と云つて、個人々々の希望や注文といふものは、策と西と程に大きな隔りのあることもめづらしくないのだから、自分の進言を採用してくれないと云つて、腹を立ててくれないで困る、在來は、私のところへ直接に、そういふユゴトを云つてくる人は無かつたけれども、俊二が責任をもつことになつた今日以後は、私から特に御願ひしたいことは、ミンナで俊二をたすけてもらひたいといふことだ、その氣持が行きまぎて却て俊二をこまらせないやうにしてもらひたいといふことである。

要するに、これからの「層雲」は「層雲人全體のための層雲」だといふ建前で行くべきものである。「層雲」といふ船にみんなで乗つてゐるのだ。だが「船頭」は俊二といふ一人に任せておいてくれなけりやいけない。私も、その「層雲丸」に乗つてゐる一人として「カヂトリ」の役だけはうけたまわることとする。これは私を信頼してもらひたい。だが、私は「カヂトリ」である。「船頭」ではない。このこ

おはぐるとんぼが瀧りぬけるなどこが生れた家
狐雨がぬらした閨引籠がさるにいつばいなくつづくに戻る
うとい妻をもち茄子はみづみづしかぼちや太らせる
かぼちやのかたち朝にみて夕べに見てここにもある
古里はぐみの木にぐみの赤くて朝、水を汲む
梅など、といつたふうな家のようす當んである
日和、肥桶あたらししくすこし氣になるのを、もつ
泣くこゑ、野良からいま戻つたばかりといつたこゑ
いわしとて、三びきやけたので、いわし
漬物桶のそばから上つてもらつて山の風景ほめられてゐる
木の芽や山で子供に給でも賣ろうか
土手芝焼く火のなほ暮れぬころ山科あたり
窓から見えて一本島の梅の木がまんかい
あたまとしつぼのきかながことと煮えとる
瓦やねねわらやねと春の月かな
引揚者に春の青空が一枚毛布が一枚
いの字書いてりの字書いて茶巾の白る梅の白る
みくぢは假名ばかり縁談よろしうめ白し
貝がらの銀紫、祭といふに磯に出て見る
俺達の友達の子様であつてこそ俺達まぐ
牛を追ひ牛を追ひ牛驚れてくる
松庵寺さまをでてあをぞち屋根の反り
工場で工員手をかける萬年膏一と鉢
くもりぞらへ出て一目くもりぞら池のべかへる
工員ふたりゆく三人ゆくこんなさまの朝

堀 英之助

池田詩外樓

財馬向歩

小倉田平

大越吾亦紅

を會員諸君にナットクしてゐてもらひたいのである

X

「層雲」と「私」といふ關係に就て、もう少し委しく話すならば、私はとうに隠退したかつたのである。

さきに、層雲二十五周年にして三百號の記念號を出した時比、私は隠退しようと思つたのが、それはとうとう出来なかつた。十餘年前のことである。その次に、選考を迎へた折にこそ、と思つたが、その時は、戦争をジャンジャンやつてゐる時であつて、層雲が層雲としての自由行動が許されなかつた位だから、まして私自身の自由行動も許されなかつた。そうして戦争がすんだ後では、新しい層雲の復刊再興といふ仕事から、又も私が先頭に立つことを要請されたのである。かうして私は、選層後の年を三つまで加へた。一々に年齢を氣にするわけでもないがこのあたりで、靜かに身を養ふといふことを許してもらひたいと思ふのである。

と云つて――昔の人が「山かけや身を養はん瓜はだけ」と云つたやうに、たゞ靜閑を求めて瓜のやうにゴロゴロとして、休養をこれ専らにしようといふセイタクな氣持ではない。そういふセイタクは當今のやうにカレッツなる時世には許されなかつたのである。又、私自身としても、まだまだやり度い仕事は禪山にもつてゐる。いたづらに、イウイウとして遊

背い油をのぐのやうな空とこれは苦々しい菜つばの行列

死顔に化粧はできない矢として坐つてゐる儼然

からす木の上でみなれてゐるけしきひくくなるお日さま

雑木のはるのいろと古くなつたアパートからついでゐるみち

ひさしまでびきし月が西へまわつてゐる

夜はゆつくりもゆる火をきいてゐるじは雁に

馬の顔もおだやかな正月の匠の口にはとりだち

火の凡の空がたかい子とくれらかい雪みちのうへ

せせらぎ南座はあかあかと六代目がさてる

朝日まぶしく兎のゆく赤い襟巻が刈田のうす氷

午をひく手甲のかすちも道のべ梅の咲く

赤旗と松の緑と雉のちらついでゐるおほりの水

雨の道があかるい葉の空

何もなない花瓶に日がさすので春が冬の次

西野啓火

藤澤せいじ

東松八洲雄

井上充夫

井上一二

井上阿彌坊

古林巴水樓

高橋良太郎

んでみたいといふのではない。

抑も、私が層雲の道に對する熱意は、今日、すこしも減退したわけではない。又、層雲の作品は一步といへども、後退するやうなことがあつてはならない。これは、私の目の黒いうちは、私ははつきりで見はつてゐる。又、私が層雲の入道に對する愛情はすこしも變つてゐない。私の選にたよつて多年勉強してきた人達は、決して他人のやうな気がしない。私はもう知らないなど、不情なことは云へないし、そんな氣持になれるわけもない。私の命のつくくかぎりはずをひいてあげたいと思ふ。

そこで、靜かに考へてみてくれれば、誰にも解ることゝはおもふが、又、こゝが一寸理解のむづかしいところでもあるが……「層雲道」といふものは「層雲」といふ雑誌とニカワのやうにピツタリと付いて離れないものではないのである。早い話が、戰爭中「層雲」といふ名稱は消されてゐたのだが、層雲の道はユウも影がうすくなつてゐたのではない。芭蕉時代には、禪關雜誌なんぞといふものはなかつたけれども、芭蕉が唱道する正風の道といふものはリツバに護持されてゐたのではないか。で、層雲の道といふものは、雜誌の「層雲」を包むと共に、雜誌の「層雲」よりも、もつと廣い處にあり、もつと深いところに根ざしてゐるものなのである。又、そ

ういふ風に廣く、又、深くすることがホントウに

層根ゆきうたかし月さし入りてふかし

木村 綠平

閨のなか厩の馬の腹まで水が來たといふ聲

柳田 流矢

子供の泳いでゐる聲を木立の向うにして椅子

馬の顔も冬ふかしくうまやが家の中

傘をささず、に彼岸の木の下をゆく

日本語で聞き聞いて春風を行く

燧あど一本の木に月がつきさきまつてゐる

臨終をみまもつてきたばかりの寒月の光世

なぐさめとては寒空が黄に赤に夕榮へるなり

木の下ながれてゐる木が花もつてゐる

ことし白い緒の下駄で石段梅さく

田には月があるころもをふく風がある

昨日から今朝の雨の枯の花

昔からここに宿屋がある梅がさくと紅梅であり

朝を掃いて山の町山のもの賣つてゐるのへ着く

永亡人梅の枝戸つてそれが明るい傘さして通る

枯山殖林の杉が家のまわり雨降る

石段あがると枯木ばかりの一軒井戸汲んでゐる

大寒冷凍の躰さげてもどり雪が雨になる

風の芽をもつ木が川にそふ工場の扉

通るたんびに見えてちちはあき見えあしたはれ

雪にをれたる松の木のいたまじき見えあしたはれ

たまごの籠も娘としこる雪はふり

とりたての山の兎とわたくしとなだれをあとにそりにのり

馬山 鳴雨

和田 光利

木戸 夢郎

小谷 信夫

佐々木 石々

「層雲の道」を愛し、此の道につくす所以なのである。で、「井泉水」といふ一存在が「層雲」といふ雑誌とクギツケされてゐるのでは、層雲の道といふものが雑誌「層雲」のサアクル以上に廣くもならないし、深くもならない。そのみならず、雑誌「層雲」も亦、井泉水といふ人間の生命と生死を共にしておわることになる。それではイケナイのである。

私が雑誌「層雲」からクギツケ關係をはなれて、もつと廣い場所に出て、著述したり行動したりするといふことは、一つには私自身ノビノビとはたらける點でうれしいことでもあるが、それが取りも直さず、層雲の道を廣く、深くするユエンともなるのである。此の意味で私は、編集の上の工夫とか技術とか、俳句會の指導とか世話とかいふことに、時間をとられたくない。それは、不親切のために云ふのではなくて、その時間を以て、もつと根幹的な仕事に向けたいのである、もつと社會的な仕事に向けたいのである。このスジミチといふものを、層雲の方のミンナに好く理解してもらひたい、ナツトクしてもらひたいのである。

経済的事などは、こゝで云ふにも當らないことだが、私は著作といふ職業があるから、「層雲」を生活のタスケにする必要はない。さりとて、金持でもないから、層雲がマイナスならばいくらでも補充してあげるといふ譯にも行かない。十年程以前に、層

病人のさかな水にいけてあり病人よろし

り、ヤカに乗り屋とても早春の道がでこぼこちぎれるほど、居をふりものがいへない

このころめづらしい日の丸たてである枯木風景病めば死ぬことを思ふ年となり立春の日がたみ

満月すぎの月あかりならわかれてしよんべん不發彈雨にぬれてゐるそこ通る

猿柳水の音流れてゐる

歸り花尻に笠敷いて休んでゐる

庭の繪花はささないで置いて春

さすらいさすらつて三十五年のふるさとの梅の花、歸る

枯枝が風が、鳥

船田刈田日かげつてきて此の道東京へつづく

鼻を背にまつてゐて少し早くぬくとしと思ふ

月の明るさよろしくもつたいなき手紙の來る(Ｋさんへ)

かぼちやもそのかげもめいげつ

通夜の明けてゐるのが庭の竹ほうき、霜(父の死)

飯尾侍城子

佐藤露紅

江良碧松

杉田作郎

善方牛臥城

山本若天

酒井仙醉樓

吉田六郎

内田六郎

關口江畔

小山飛南車

親井密牛松

花ひらくおもむろにあさ

八十二の元日のまた人が來たりまた雀がきたり

餘る命勿體なく作つては履き履いてもらひ

ランブ澤山ある室を通つて奥の落葉の影つてゐる部屋

一家族稲束をおろし四日の月拜む氣もち

彼が自持自活してマイナスを出さぬやうに、且つ、幾分でも毎月プラスを生ぜしめて、それを以て層雲の弘布宣揚につとめるといふ趣旨を以て「層雲會」といふものが設立されたことがある。層雲會の活動は、その後中絶されてゐるけれども、此の趣旨と名稱とは、今日でも存続してゐる。で、昨年、金融緊急措置令が出た時も、私のポケットマネエが封鎖とワクとの中に制限されてしまつては、層雲の發行も危殆にヒンするといふので、層雲同人中の有志の方が相談して、新しく、層雲後援の機關が作られた。そこで、その運営上の責任者とて私がヘンコをあづかることになつた。此の後援機關は其後の經濟事情、依つて、新しい銀行令に依る規制を受けた爲に大そう不利な次第となつたが、これを何とか有利な状態にみちびいた上で、清算をしたいと責任者としての私は、責任を感じてゐる。それだけが今の心ばかりである。

彼二が今後の層雲を經營する上では、それを必ずしも京都へ持つてゆかねばならないことはなく、以前通り、東京で發行してもよろしい譯なのだ、種々の點で、京都の方が運営上の諸事情が好條件にめぐまれてゐるから、京都で出そうといふのである。又、彼二の家族は京都に住んでゐるのだから、その家族と共に居て仕事をなさる方が落着いてよろしいことも、當然のことである。

散る葉は日なたの二三本散る
小ぢかなは戸毎に干しこのへん砂のうへおちば
きつゝい霜の門のくわんぬき
わたしの秋田に彼二さん木槿はまだ咲いてゐる
刈るばかりになつた稻の穂なみ發電所とそまわり
父の坐つたところにすわりさくら咲いてゐる
更けて月が出て岩山の松は黒くて
ふんわりゆきふらした木がならび水ぎわ
ひかりきびしく川の流れ冬
松蔭ももう出そらな海のいろ、松かきをひろふ
わかめうりにきたような灸すえてゐる
しづかさ省なにおどろいてたちしづかさ
つかれてどろ田の中ともりめし家々のわたしの家
日がおちて一そう二そう、それから淡路が灯る
浪音や寝させてもらふばかり
寒いといつても梅咲く年忌に來し君と幾年ぶりか
冬山まむかひの道のぬくい日ざしのバスのハンドル
降り足らないでも願うた雨であるちらほら梅
世が世ならなどとも思はない咲いたと思つたらちつてゐる
あとの鳥もいつてしまひ夕空
柿が赤くて木にある道はたづねずに行く
父の腰などたたきまいらせし父の齡私には子のなく
葉の見える家を借りて、ともす
暮れ残つてゐるものは海の中の鳥居
森の中に池涙はふいて笑つて別れよう

木村丁字
木村乙羊
下山一水
佐々木味化
細谷ノブキ
金井三頁
金平二火
木野本 鳥不止
鈴木芋村
山本木天齋
淨心寺 淳

水のすがた

井上三喜夫

學校を卒業して數年後、私は始めて萩原井泉水先生の自由律俳句の道を知つた。そして知ることが深くなるに従つてその道愛するやうになつた。私は先生の道に隨つてゆくことが私自身を知る道であることが解つて來た。學生時代授業の先生よりも遙に根本的な恩徳と影響とを私は先生に感じて來た。自由律俳句の道を感じて先生を知り、先生に依つて自由律俳句の道に入つていつた私である。それからの二十年である。私は日常先生を始め同行者の俳句文學と親愛し、そこらにある暖い井泉水風景を思ふ度に、先生 對する敬慕 情を禁じ得なかつた。その私がかゝりにかりそめの筆を執りたく思ひたつたのは私の中にある先生を、といふよりは私の自由律俳句の道を追求めないではゐられなかつたからである。

如上の理論：先生と芭蕉 ついてもあてはめる事が出来る。年齢から申せば先生は既に芭蕉より一廻り長生してゐられる。然し先生の芭蕉探求の道は四十年一日の如く続けられてゐる。先生は芭蕉を通じて自己を一筋に創造してゐられるかに感ぜられる。私も亦時に觸れては芭蕉を想起し、しきりに懐し

どこかに月のある雨に傘さす
甲子 松
にらの花白く朝のをんどりめんどり
鶴が翔うんだらしい聲の娘さんたちお幾縫
窪田三洞
冬の 日お茶は松葉でわいてゐる
青木背夫
さらさらと降つた雪を月夜にして浪音靜かな
山のひだにはまだ雪の相模國原夢の四五寸
餅つくこゑのみんなわが子でことしの餅つく
我妻覺神明
袴のかげ冬木のかげさなみない池にそうてきた
新納香樹
竹うちわ、月もるる板の目にさしておく
煙突のある機跡が富士を霞景色にしてゐる
齋藤てつ人
言はでものこと葉もなくてかきの木一ぼん
話して海のちかいかん山月夜となる
齋藤てつ人
五十をこして七草の露の中の芹とて背し
増村辰郎
雪に日のさしてゐる馬の寝薬をきる
またいつか來ん此の街をじつと見る露笛とは知りつつも
澁谷鐘介
思ひきりどなつて見るドンと飛沫をかぶつてまた(黃海)
山田梅軒
からす瓜赤く朝はやい汽車へ急ぐ
ぬれてもいいものはそとへおきひるからしぐれ
秋日さす一けんありたにのむかひに一けん
佐々木行人
草が雨の來る風を感じてゐる秋
坂部蝶三
上の橋を、また下の橋を渡り水底の石も秋
氏家芳秋
ぶどう棚ひる月が白くてまだすつばいぶどう
山岸登秀
日のさせば冬草、水わいてながれるところ
有竹四郎
配給のみかんをちよつと風呂敷にして風の日
渡邊天仙果
まさしく半圓のじところら夢畑のもえてゐる
大月喜三郎

くなる時がある。古來芭蕉の遺言をむつかけた人は
いくたりあつたか知れない。芭蕉の生きた姿にやる
せない魅力を感じた人もまた数限りなくあつた。時
のへだたりを越えて芭蕉がそんなにまでわれわれの
心に生きて親昵の情を持たしめるのは何故だらう。
私はこの疑問に答へたかつた。漠然たるその疑問を
主題として私はいくにか、考へてゐるやうな、考
へてゐないやうな月日を送つてきた。

人間性、一般性——人はそんなことばで容易に抽
象するかも知れない。或は芭蕉の歴史の中に組織を
立てて、客観性を持たせようとするかも知れない。
私は私自身を感じることに於て芭蕉を、そして先
生を知らうとしてゐるのである。かうした取扱方が
妥當であるかどうかを問ふ必要がないほど、今私は
苛烈な時代の風潮に堪へるべくたよりなくあつては
ならないと思つてゐるのである。

思ふに人々は、各々それらの世代を生きつゝ、芭
蕉をおのが道として生きてゆく必要に迫られたもの
があつたに違ひない。それら芭蕉の人としての大き
さが、かすかにそれらの人の嗜好や息づかひの中
しみ徹つたからばかりではない。時に隨つて生きて
ゆくべく運命づけられた人間が、時を越えて生きて
いつた芭蕉につきあつて齟齬し、迫力を感じたこ
とに原因してゐる場合が多いであらう。

時を越える——それはまことに夢みがちな足が地

日本の世相子におしへリンゴの皮上手にむかせ
正月なにやかやとまだ梅のつぼみの枝がくりやの水の中
骨にしてきて焼香、けふけいかいにはいらなくて(蝶爆死)
人は牛市へゆく野が暗れて雲があつたりして
一本の南瓜で花が咲いておしめ干してゐる
正月の流れ星、燈台の灯は海を廻つてゐる
日のおちた空がもうつめたくてコスモス
暮れると白波犬がほえてゐる
更に種を蒔き木が落葉する
日が寺の森へまわるとお彼岸がくる
枯葉、正月三日は細い月がある
雲のきれ目からの早春の日ざしが帽子のつば
遠く高嶺の雪窓へ首出してはなしてゐる嵐で
毎日笑つてくらしとていつたつたか別れたそれぎり
みそ豆のぶつぶつ煮えてゐるのへ来てくれた君全く久しぶりだ
ふな生きてゐるのでうごく甕に雪ふる
あまりしづかな冬の入りの月が出て
びんぼうにもなれて白いさざんかうつくしと見る
いわほによせてはくだける池のうの鳥が二羽
うみづきちかきつまとねてゐて子がいふこと
かどから幾月からころとかへりゆくよ
いおうマツチが火になるむかしのきせる
案山子はたをもつ風ふいてゐる
梅のまだ暗い夜明けおいとまする
月夜になつてゐる梅が花つけて寺の門内

府川眞砂夫

岡田花子

田中貫川

安藤叢平

田代俊

平賀星光

三浦香女

前川紅二

横瀧碧樓

太田鐵石

近藤次良

酒井空史

瀧川水音樓

山田こころ

小西佛舍利

北村九泉子

についてゐないやうなことである。然し芭蕉が「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」と五十年の生涯を將に閉ぢようとする時にあつてさへ吟じたことを思へば、夢みるといふ言葉で説明することがこの悟達の人に對する評語として決して不當でないばかりでなく、まことに平凡なこの夢みるといふ言葉の中に芭蕉が感ぜられてくるのである。「枯尾花」はこの句の後に、「是さへ哀執ながら風雅の上に死なん身の道を切に思ふ也と悔まれし」と説明的敘述を残してゐる。この記述に依るならば、芭蕉の夢みるとは藝術に生きること以外にはない。夢が芭蕉の全部といつてもよい。芭蕉が人間解放の湖にのつて元祿文化樹立の大きな役割を果したのは芭蕉の夢みる心が強靱であつたからである。そして時代も夢を必要とするほどゆきつまつてゐたのである。

壽旅邊士の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なん是天の命なり。

芭蕉はかく語つた。その時代に於てはそれは容易に語り得られる國內情勢でもあつた。芭蕉の蕉風雅の上に死なん身の道を切に思ふ熱情は芭蕉を壽旅邊士の行脚にかりたてた。そして彼はその實踐に最後までよく堪へた。時に芭蕉は人を厭ひ、憂鬱であり、弱氣が出た時もあつたが、彼が最後までこの覺悟を押し貫いたことは逞しい。

藝術と永遠との問題、そして芭蕉の一貫の道、そ

赤いつばき黄いろいしべしづくやんでゐる 田中星々
 ゆききえると農業倉庫その横水菜畑 森田十雨
 松の葉にちらちら日ざしして春寒料峭 高崎貞之
 滿月ゆきは盛りあげてあつて影をもち 佐藤 龍
 月に照られて牛の顔ねむつてゐる 堀切春扇
 冬木に朝日さしてくと少女たち自轉車でくる 角田重信
 ちつてしづかな葉にちりかさなる 秦 是道
 残り星の明け方の風にちりそむる 河重更涼
 ちよつと笑顔に笑顔で朝遠山晴れてゐる 片井溪巖子
 視界にはいつてきててふてふ、まがてゐる 米倉久枝
 春が かたいつぼみのまへに手をあわせる 青木水仙花
 夢の芽けふはおなかの ことをみてもらひにゆきます 夏堀望子
 うららかや蝶のやうな花に蝶がきてゐる(ハワイ) 田中 操
 月光 するどし 屋根からまぐに山
 木の間に見える千鶴の早春の海このごろ人のゐる(ハワイ)
 電話であなたとの話が小鳥籠に小鳥ゐてしづかな
 雪山を遠く青いオレンヂのアメリカではたらく(加州)
 寒明け 光る 十字架さげて 尼さん 達通る
 春の日おちても明るい山を越えてゆく(機加州)
 太陽山から出て山に入るあいだの花仕事です
 陽が てる と 藪の奥の椿の花のありどころ
 師走、風の中拾うてきた石を漬物石にする
 鯉、もみぢした木と松をうつした水にゐる
 ふきつけられたように木にとり一羽海近いこのへん冬菜ばたけ
 よくふる事もトラックがこぼしていつた虹いろの油で

これは芭蕉に對する一般的鑑賞として受け取られるものであるが、人生が無限の深さを持つてゐるやうに無限の魅力をそこに醸してゐる。然しこの芭蕉を身に近く立て、この道を歩きつゝけた人は稀である。

芭蕉につながるもの——こゝにさゝやかな萩原井泉水論の結語があることを、私は先づ書いておかなければならない。

芭蕉は拙き身と道路と風雅とを三位一體とした。先生は俳人的生涯の出發に於て自然、自由、自己の一體を握唱した。「造化にしたがひ造化にかへれとなり」芭蕉はこの生活態度をもつて彼の祈願を踐した。先生もまた隨を以て生活・方向を規定せんとしてゐる。そして、今日の先生の問題もこの一點にかゝつてゐる。先生はこの一筋の道を確信をもつて流れつゞけてゐる。

自分が「非泉水」と號する通り、「水性」の生れである爲かも知らぬが、私は生きて動く水の無い處では、やりきれない氣持がする。(柿と桃)

先生がかく水の性を自分の天稟と感じ、生命と信ずる處に、先生の生活と文學との限界がある。先生が際る数々の言葉の彼方に私は流れを感じ、生を感じ永遠の若さを感じる。先生の「金沙子」の如く撒きちらされたそれらの作品の底を流るゝ水、私はそこに流轉を受け取る。その流れにのつて人生の一點をいかに把握するか、先生の自由律俳句である

霧がシゲナルを背くする夜の遠い海の音のような
まだまだ遠者でゐてもらはねば、湯たんばの口
はくさい二つに切り四つに切り白きさらに白く
平和とはお精靈へ迎火たいてゐる草のあかり
うちの子でない子が泣いて通る松の木のかくれい
山吹のなにかに思ふだにはや暮れてくる
聞ききつて梅の花のぬれてゐる朝の雨
昔なつかしい海峽の星が變らぬ愛情を信じてゆかう
空がいちめん雨模様となつて暮れる時の一つの灯
更けてゐて山岡部落のお登さんの部屋はともつてゐる
飲んでたたんて薬の紙四月雪の降る
春がまだ寒くて月夜のそばの星の一つ
わらぶかまだ夕日があるのであそぶにはとり
波がもりあがつてくる海から釣ろうとする
馬そりの鈴の音も日の暮れおそくなつた子供等のこえ
はぜ釣の手を洗う川水夕べあたたかく
月の明るさとどかない質屋ののれんである
冬草馬がはむ音の故郷の便り讀んでゐる
スクリュエーとまつた船の夏の日また暮れないである
これがびんぼうかづらといふ垣にして白い花もつ
はざの列なら影なら月夜の暗いところ轟鳴く
小鳥水のみにおりてきて山影の日のある影
近くの瀨音遠くの瀨音いちにちすましてもどる
稻の穂そこからすすきの穂の阿蘇は大きくけふも晴
唐きびの味もこれがおしまひごろと燗いてくださる

關根ふさ子

三好米子

筒井頼子

中谷 操

落窪京太郎

佐藤 鈴村

小林 未未鳴

渡邊伊佐雄

鹿島 黙太

相京晴樹

森 窪 其 果

白石 默 忍 冬

換言すれば、自由律俳句は流れそのものである。

流轉——このことばは人間が「時」に随つて生きてゐるといふ條件を考へる時、それは私自身だけの關心と探求に止まらないであらう。廣く人間の問題として無意義でない筈である。

さて自由律俳句は俳句にあらずといふ非難が俳壇的常識となつてゐる。然しそれは先生にとつて關心はあつても、文學的問題として取り上げらるべきものではない。

それ——句は9であり、45、即ち、やはり9ではないかと、私は腹の中でひとり笑つてゐる。

私は先生のその苦の底に先生の文學の在り方を感ずる。今日に於てこそ俳句は文學として存在が明らかになつたが、所謂定型俳句は他律的なるものが根本にある。といつても、他律とか自律とかの間はまことに微妙な問題であるに違ひないのだが、自由律俳句はどこまでも自律的である。流れそのもの、表現が自由律俳句といふ私の申し方からいへば、他律自律を越えて、變な言ひ方だが、自然律俳句といつたら、解りがいゝと思ふ。

風景といふものは一種の空氣である。

この先生の言葉を噛みしめると、先生が掴みきれない空氣を掴まうとしてゐる求心の熱情を感ずることが出来る。風景に遊んで空氣を食べてゐる先生があるが、先生の作品が決して遊びでないことを私は暗

風呂へゆくみち豆の花のいちごの花も咲いてゐる
マブをでると雨かへつてきてきく雨の音がもう春
つきにひらきそめてゐる
きのうより今日の芽ぶきやうは茶館の音楽
まことまくとめぶく

中村杏味生

齋藤青圃

青 まさよし

日向野秀策

淺井冬二

武田 桂

松田 勇

平岡國次郎

石原白竹居

目黒亮助

澤木 昭

けいとうの花小雨はしみとほるほどな赤き降つてゐる
さざんか朝はもう霜のふるを掃いてゐる
枯木二三本のまつたく雪ふる刈田となつてゐる
静かに息を吸うてゐるきもち音なく雪は降つてゐる
赤とんぼ赤ん坊をうまくあやせるとしになりました
雨あとの川音のたかくて大根の虫とつてゐる
月夜のくらいとこころの水音
松は新芽となる少女白い服でゆく
涼しく夕べはゆうが燈ともしてゆく女のことども
風鈴、籠のきりぎりす、夕べと旦と過ぎゆく

情する。その空気が先生の藝術である。私はその空
氣の厚みと先生の藝術の厚みとを同じやうに考へる
芭蕉が俳諧に遊ぶばかりでなく俳文に依つて感懐を
語つたやうに、先生もいかに生くべきかを廣く論じ
してゐられるのは、自由律俳句に於ける啓蒙的仕事
や先生の反省的資質に依るばかりではない。自由律
俳句が精神をさうしたひろびろとした世界におき、
作家は空気に身を放つより外なきものであるため、
所謂隨筆といふ形式にこゝろを托して、駢明的敘述
を試みられてゐるのではないかと思ふのである。

六十にして立つ。

この言葉は今日の先生の言葉である。この言葉は七
十にして立つと改められる時があるかも知れない。
先生の流轉に對する確信を披瀝したものである。そ
して先生は永遠に新生してゆかれるであらう。この
永遠の若さに、「あまみ、水分、こく、香氣、此の四
拍子揃つた」(柿と桃)——白桃を仙果と讃へる先生
の秘密があり、樂天の境涯がある。こゝまでゆきつ
いた先生の個性は、人生六十年の厚みと豊かさに養
はれて、淡々として安らかな潤ひを感じようとして
ゐられる。先生の藝術のあまみとうまみがそこにあ
る。先生の文章でも、自由律俳句作品でも、俳諧で
もいゝ、それらが持つてゐる魅力は、先生の言はれ
るあまみであり、水分であり、こくであり、香氣で
ある。先生の天稟、六十年を流れてきた厚味であ

柿のもみぢの、水はゆたかに流れてゐる
木蓮さいてここの家の白い木蓮、影をおく
地下からは灯のもれて今晚ちらちら雪になる
冬木に虹が、草はうつくしくぬれてゐる
ひとさきれの白雲のうく月の澁谷も焼け原
このへんらしくつくつくぼうしその寺のうちらしく(訪大泉園)
月が月の色になつてふうりん
夕風、雨あがつたつるが手をまがしてゐる
春かぜ昔のやうにおよめさんは歩く
はじめましておひげのあるじおひなさまもゐて
日向こぼれたのもめを出してゐて何事もなく
蔵があつて梅があつて梅さく
映畫館がはねてからもしばらくは灯が明るくて果物屋
やけあと雪ふるやけあと雪ふるとこまでいつても
月夜浪音八ツ手花さく
月夜の岬のこんなところに墨がある
かつちかつちと拍子木つきよ山茶花こぼれす咲く
かがやきて雪の、つきいづるより山のはれわたり
春がもう納屋のなか藁打石に日をあててゐる
義足重くて雪のよごれし町のひるとき
ジイブで犬つれてきておりて日本の町がうすゆき
これが近道しじみのゐる流れにそうであたか
河のいつもあるところにある船今年が暮れてゆく
さむい足音あたたかい火持つてきました
木をぬらしてやんだ雨木の中灯つてゐる
井上有紀男
品川幸一郎
佐伯美則
佐藤仙水
小島胡市
古川紅雲
深見武朗
印南健治
木村月明花
矢内樹一
内久根豊己

り、技巧である。否、技巧とはいふまい。私は技巧を越えて、そこに流れのやうなこころの動きを感じ、空気のやうに漂ふ餘情を味へば足りる。先生はその大空のやうな魂の奥底で人間の自由へ迫つてゆかれるであらう。それは先生自身の自由であり、幸福である。人のために生きることさへも、それは先生自身の祈願であり悟達である。ここに先生の個人主義者としての限界がある。然し個人主義の完成が、既に社會主義の社會へ移行しつゝある今日の日本に於て無力であらうか。社會主義が、そして共產主義が、永遠に人間を問題にせざるを得ない意味に於て、先生は個人完成への苦しみと痛みをももちつゝ、流轉しつゝけてゆかれるであらう。先生は今日の如く明日も自由律俳句に断念することなく、その作品は枯渇する時を知らないであらう。

先生は運、鈍、根といふ事を語られる。それは所謂俳壇や世俗と戦ひつゝけて來られた先生が過去を反省せられた時の、自分自身への慰めの言葉でもある。難に、商人にも、政治家にも、學者にもならなかつた先生が、曾て一度はその岐路に立つたであらう。過去をふり返つてみた時、運といふものゝ強靱さを感じられたであらう。過去四十年、自由律俳句を固持してきた先生は鈍であり、根の人であるかも知れない。然し、先生としては、自由律俳句を作らずにはゐられなかつたと申す方が一層根本的であり、

降つても春の雨のユイカリ並木は海へつづき(ハワイ) 丸山素仁
 パイナップル歯をわたり暮れのこる山のかたち
 こころ知つた家ばかり赤やきいろのハイビスカス
 星の色も山を焼く遠い火の色も春
 並木が松の三日月さん道は出雲へ通る 木村いわじ
 子牛もわらんじはいてばくろうさん着ぶくれてゆく
 家が建つて霜、住みついてもらひ水にきてをる
 かんなの頭をたいてゐる音も朝はれてかげのところが霜
 くれぎわ川ゆくポンポン船の音もことしがあす一日でゆく
 この驛一人二人の乗り降り雨の花びら 菅崎道雄
 宵、夢の春といふ感じ雨がふつてゐる
 花があつて花が散る池のおもてにちる
 海より朝日しづかにさし山々冬 上柿小平
 ゆうべからの浪が島のまわりでおどつてゐる朝
 がへりざさきの梨の枝出棺を待つ
 暁のうちへも朝日がいつばいな菜畑の霜 佐藤専子
 わらべみの虫のから笛にして落葉かく母を離れる
 雪つもる木が水にうつり水にふる雪
 ぼたん雪となつてゐるそりひいてゆく牛 植田市籠
 映畫館のよこのあいてゐる窓で雪どけしづくしてゐる
 つららに月光山のかげこく 大竹大三
 だまつておいて行つた茶わんとわたくし風にちる葉
 明日はまた明日が来るよこれた足袋をぬぐ 小牧二郎
 なにか演説してゐるそばを通り白い花など買ふ
 へちまの花朝の雨やんで人通る 副村赤青葉

先生自身に忠實であつたといふ方がほんとうである。先生はこの國がどんな世の中にならうとしても、政治の貧困など嘆くことはしないで、腹の底で苦笑しつつ、縹渺たる風につて流れゆくところを知らないであらう。

然し私は反轉して、もう一度先生の流れを捉へてみたい。思へば先生が自然の扉を叩いてからもう四十年になる。この國の政治の在り方が或は屢々先生の流れる自由律俳句の道を阻んだかも知れないが、隨處主となれば立ち處に皆眞なりの決意を先生は愈々固くしてきた。隨處主となるといふ意識は先生が作品で自分を示されるよりは容易に先生の態度を説明してゐるかも知れない。換言すれば、自由律俳句は、この「隨」の思想を作品として具體化したものである。更に「隨」のあるところ、先生は「ほんもの」と「にせもの」との混迷してゐる現實に生活して淡々たる和やかなまなざしを向けてゐられる。即ち「隨」は先生の生活態度である。曾て芭蕉が理念とした「輕み」といふことばは、隨處生とならむとした芭蕉がゆきついた世界を説明してゐる。先生は、藝術の美しきは單純化であるといはれる。單純とはものに忠實なことであり、自然に隨順することである。そこに——まことがある。かく思想せられる先生は定型といふ意味こそ焼きすてたけれども、日本文學の傳統を固守してゐられる。自然の生命を

冬の 日ひとりではたけしてゐる
たが屋さんに少し日がのびて来て茶うけの梅ぼし
昔に返つて舟が荷を運ぶ世の中となつてねこやなぎ
風がとばして來るのは屋根の雪であるらう屋さんの笛
流れに石も日がながくなる
冬の川に日がさすと舟のしり波がついてゆく
雪解の太陽と芝居の旗がある空
あめふりゆきふりけふ雪をからすあるいてる
から松の林が月がでたばかりの雪のこの道
一軒たつて二軒となつて冬空晴れてるばかり
雪どけのみちの郵便さんのおもたい黒いかばん
春の雪とける日が一日畑のぶつきらぼうの桐
とうがらし紅くあるべき秋日れいろう
まだ冬の日はあつてすいすい挽いてゐる
一日はたらいてふつてつもつてふつてくれてゐる
おひがん、石の上がよいくぼみでくみわります
船はうなぎやの裏口に着く白粉の花さき
汽船發着所は一本の夾竹桃でさざなみ
今日はお祭の立葵 麥湯にしてゐる
道を川に秋がどしやぶり
ぞくぞくあやめの芽朝が少しつめたい温泉じり湯けむり
日でりつづきの後は雨つづきの糸瓜のかたち
人ひとりのいのち血管に血を入れて雪ふる
風は病院の落葉をちらすと窓の灯がけんびきようのぞいてゐる
焼あゝ種屋が一軒できた種を買うてあたたかし

一色如佛

照井燈光

小松粒三

小松さとる

桐井あしひこ

天沼聚人

鹽崎寸南夫

遠藤虹水

體驗し、流れの表現である自由律俳句を「ほんもの」と確信してやまない先生がこゝにある。

隨筆主となる——この人生觀を藝術に生きる人々はひとしくこよなき光榮として享け取つてきた。然しこれは芭蕉の風雅に生きる心がまへとしてだけ享受すべきではない。そこには芭蕉その人の資質がある。三冊子に於て門弟たちはよく芭蕉の理念を祖述し、解説してゐるが、芭蕉の作品をかみしめ、ゐる時の方が何となく芭蕉に觸れるものゝあるのは、直接に、その底にあるもの——資質にふれあふものがあるからではあるまいかと思つてゐる。

(なほ資質については家庭的血脈にまで遡る必要があり、大切なことでもあると思つてゐる。)

芭蕉は旅に居れば、旅に居て旅を忘れるほど心は平安であつた。芭蕉が片雲の風にさそはれて漂泊のおもひやまなかつたといふことは芭蕉、天稟であり、自然の和を信ぜずにはゐられなかつた彼、稟性に因るといふことが根本である。先生が、自然自由自己の一體を祈願せられるのも先生の資質である。先生は芭蕉の道としての「和する心」を、

・自然科學者は生存競争といふ語を使ふが、これを鰓肉強食の意味と解しないで、其處其時に順應せざるものはしげんに亡び、其處其時に調和するものはしげんと榮える、之が生活の法則だと解すればよろしい。自然に於てさうである如く、人生に

雪降る、白波、取りて島々、こん夜はつもる 三宅酒造洞

鏡に春の船が煙吐く床やさんベタリバタリとく
貝がら山の春の日貝がら捨てに來る 福永夏木
八ッ手にばらばらふりだしたあとの晩
とほい波のひとところ日のさしてゐて海のふゆ
たちたら岩をながれて水が春
立春といふ日の竹の幹のしづかなるひかりよ
なんと端麗なほとけとなつて待つてゐたことか
今にももの言ひそらな死顔にも言うてならんで寝る
寒い空、死に目にあへなかつた子を焼くけむりで
まだ火のある中の骨はさみあふ筈がちぐはぐ

雨の小屋であるこなひき唄 土屋 兎子
みづうみの波がかげよせてゐて三日月
鳴け ば 波 からも 連 れ て たつ

しろきめしからいきがでてほとけさま(淳右衛門居士)
この村うどん工場など小流には河骨も 萩原 萩
きこりの背の犬のこざりに日光ちか秋の日さし
るはがきに徳山の湯にて」と書いて山のおちば

日ざし、と尾をひいてとぶ二羽にして雪 降矢 百峰
冬 木 を た ほ した 雲 で あ る

ガラス 芽ぶいてゐるメニューに腰かける
少年卒業したことの春の山と山羊を見てゐる
竿 に ほ して 乾 いて 暮 れ て みる

まつとさくらと水にうつりさくちはち
岡田 浪子

於てもさうである。人生は眞に和する。これに於て
進化し、向上するのである。(芭蕉隨想)

と、芭蕉の實生活態度を以て例證しつゝ説明してゐ
られる。以上の語から推せば先生の和は理念として
の中庸の道を固く守る處にある。斯く考へて來る
と、先生の理念としての「隨」の在り方が理解せら
れ先生の理想家肌の肌合を體感することが出来る。

先生は昭和十八年といふ年「流るゝ水の言葉」を
書き綴つて、水性の如く方圓に隨はむこと——和を
祈願した。然し、その頃の先生の心に去來したもの
は流るゝ水ではなく、どちらから見ても美しい、い
つ見ても美しい富士の美しさに迫つてゆく努力であ
つたかに見える。そして先生がゆきつかれたかに見
える究極は淡々たる自然そのまゝのかるさであつ
た。換言すれば、和にかるさを見、そこに美を見る
先生の角度がある。即ち富士を見る先生と、流るゝ
水に隨ふ先生とは美に迫る先生として遂に「一不
二」である。

先生はこの間の事情を又次のやうに語つてゐる。

時の世は幻であると悟りきつて、其の幻の花を賞
し、其の幻の月を吟ずるといふ心になりきること
が出来ぬならば、それは實に平靜なる「無事」の
境であらう。禪にて言ふところの「了然無事人」
であらう。「動」即ち「靜」であり、「靜」即ち「動」
であるといふ「動靜一如」の境涯を體得すること

電氣がきてラヂオが口をききだした春の雨です

姑娘池のべにたたづみ藤の一枝は垂れ

庭をはたけにして少しよくなつてゐる訪ねられる

はれてくぬぎ林のうす雪のしづかにも空

冬一日のぼつとりと灯つた障子

暮れるとランプともしていかつりにゆくたくましき言葉

しぐれてゆくにはれてゆく佐渡のかたちとなる

師走、町へ橋が一つ雪へ道が一條づついでゆく

葉のなげ木、日だまりは鳥小屋のとり

羽子つく音の二日はくもり日の障子のうち

冬の山から煙のぼりてまだ日がある

雪はれ鳥小屋へ木のかげのびてゐる

山が月を、何かから話せばよいのか

石の美しさはまたたすめば秋

藤野藩紅丸

波多野翠江

皆川蓼二

泉 恩三

水谷 實史

名 雪 理 輝

佐 藤 蚤 明

佐 藤 蚤 明

佐 藤 蚤 明

佐 藤 蚤 明

佐 藤 蚤 明

佐 藤 蚤 明

佐 藤 蚤 明

佐 藤 蚤 明

が出来たならば、それは實に澄みきつてゐる水のやうな氣持であらう。その氣持を芭蕉は「閑」と云つてゐる。(芭蕉隨想)

この「閑」を凝視するのは先生の資質であり、先生にとつてこの資質にまさる眞實はないであらう。日々旅にして旅をすみかとした芭蕉の覺悟を平常心とすゝる先生の志のある處、先生にとつて消え去つた四十年の自由律俳句精進の日と同様、遠い希望の日も、所詮は先生の自由無礙な魂が創る平常心即俳句的音律の世界が永劫の回歸のしらべにのつて奏でられることであらう。

微熱の、手にして何ふ花かな 蟻 郎

先生の愛弟子蛸郎は遂に乏しき身を歌ひつくしたけれども、その若きいのちにさへ人生の花を感じた。そのすがたを靖郎日常和平の魂として私は佛を感じずる。

井 泉 水

こゝに寝てゐて讀んでゐた本が一ぱい山吹の花

やまぶきの花もう一夜といふまたくるといふ

昨暮春、先生は、先生が愛着しておかなかつた今は亡きうたびと内田創平の居を訪はれた。ほろほろと散る花は限りなく惜しまれたけれども、先生は先生の旅をひとり雲の如くゆかれるであらう。然し先生は、

只人の行くにまかせて行くべし、神明の加護かな

うみ、すな、あしあと、それをふんでゆく 内藤善知

髪をかきあげてから手をひぎの上のせてゐる まどが あゝる、ほし が あゝる

ののほな摘みためるたまればなればなる あおきよもぎのにおひを強く感じて春よめなも 童女ひとりひとり春の帽子をつけがっこうへゆく 松村邦夫

なかに花賣りがをり水仙ばかり ゆうべの雨けさ散つてる梅の朝湯にゆく 皿に鯖のいろとしようがのかほりをひるにする 一個の労働者としてかへる身の夕鏡富士

そらにおつきさまこども日記をかく たのしいこともさみしいこともつめきりばさみ 焼トタンの屋根の月が春立つ満月 北田千秋子

おるすでもおたづねしてきてうめさく 水はうつくし春の日の水の中の草 鹽田正吾

木の 中 の お と が 水 の お と やけあとあをなにあめあををとふる れんぎよう、風があふれるほどな夕べを吹く 瀧山重三

さくら、池のまあるい月夜を 眠く 秋は銀線のよる雨が降る體温計の目盛 曇 い 一 匹 が 啼 く

雪に白うなる大學の建物一室ともしてゐる あをいそらが春になる大學の門からひとり出てくる 木庭たつを

さざなみあをい月夜となり櫻島には頂の雪 月の雲から遠いふねのふえ靜かにおもひ迷うてゐる

らす慈なかるべし。

と曾て芭蕉が言ひ捨てた愛情を心骨にしみて感じて
みられるに違ひあるまい。こゝにも和に殉ずる先生
の風貌を感じないではゐられない。

よく見れば づな花さく垣根かな

これは遠い日の芭蕉の風雅であり、目に見えないそ
の自然のいのちを體感した芭蕉の和の心のあらはれ
である。

千秋子

燒跡むかしの道はありなづなの花はさく

先生の若き弟子北田千秋子はひろびろとした自然の
心にふれて、廢城の一日一日の生活では、つても、
そこに、生きる日の力と和を感じてゐる。

私も亦、敗戦後文字通り廢屋に起臥しつゝあわた
だしくも晴いとしつきをいつか重ねてきた。そし
て、あしたゆふべ、今はすたれた水の都ひろしまの
水のすがたをあこがれては、水のいる、水のすがた
をひとり見つゞけてきた。ある日は濁り、ある日は
澄んでゐた。そして水は河床が日に日に變つてゆく
のも知らぬげに流るゝまゝに流れていつた。私はそ
の水のこゑでも聞いてゐるやうに、寒い橋の上に、
風のきびしい堤上に、何度足をとゞめてそのひとゝ
きを惜しんだことであつたらう。そしてけふ、朝が
來たやうに、はげしく和を戀ふこゝろに驅り立てら
れてこの拙文を草した次第である。

春、枯草のかぜは海からふく 原田赫城子

灯が雨がぬらししてゐる石ころはる

水にくれゆく影はうめがさく

海の橋が白い夜

落葉の中の蛇のなきがらである朝の透明

冬の火星が光つてゐる試験管内の化學反應

親にそむこうとする眼が星を見てゐる

すぎなよ寝ころべは空よ

春になる水音がくらくなる橋

枝が、咲く月のかげ

空気が梅の匂ひする妻と月夜のかげ歩

枝が月夜の空気が芽ぶく

いわしの頭皿にのこして三つと七つの子供と夕餉

垣根なにか匂ふ花のある月が雲をはなれる

背なの子歩いてゐる子湯屋のもどりが月になつてゐる

吾が子わがかすりのモンペでさくらおちばしてゐる

竹あをくして朝あそぶ犬ころ

とんでとんでとんでいつたすすめ

なにもないあを空がある雀とんでゆく

山のものとりて來箕にほしてあるなり

月をあびて竹、その上が月夜

船が月夜の中秋夜どうし

トランプの玉機が劍など持つてゐるのも春宵

旅のきせるは帯いせをぬいて通す

月光、青い猫でな

松岡蒼兒

篠崎青鳩

物部卓郎

片岡樹裏人

芦立陶抄子

明 月 壇

きのめ大きなところやのかがみにる
春の、ともりそめてからひらひらふる雪です

櫻井輝郎

村のいえのあかりが見へ月のぼつてくる
つきがささなみの水をたたへてゐる山のほとり
木に星がでて春、ともしてゆくのはとついでゆく
月からいちまいもいでふえにしてゆく

加藤六六子

ふつて雨がちつて櫻となる水にうく
それは静かな雨が豌豆の双葉をならしめてあま黒い土です

山には海が春らしくたをへてゐる
野におけといふすみれ手のひらのすみれこして眺め
くままつた冬の毛をぬいで春の體になりましただの葉です

池沼はるを

泡の一つ一つに青い空があつてみな消えてしまふ
はるを月光に火の粉をふきあげ燃え落ちてもえつづける

ひわ色の毛糸が縮んでゐる幸福
土がえんどろの霜除いらなくなつてゐる
富士が雪をもつた蓑蓑が黒うなつた

内藤英夫

水にも芽の、春淺き水にささなみ
春がきてゐるそこまで先生とあるく
月は出ごろの芽ぶく木が扉のうら
梅はさかりゆ目のさしてみつらみ

少しは日ものびた夕日の伏籠のにはとり
播州らしい山と淺い池の凍つたのと麥畑

富永谷衣

梅の枝にみのむしが雨
掃いてゐてぬれたほどの芽がくこ垣
桶につぼみの梅など甘酒屋さん

ひよの聲が大寒

仁平青蛾城

桐の葉ばさりとおちるとゼネストの宣言文をはる
ひる前の稻はひるさき米になつてゐてお祭
昨日墓となして今日霜ばしらたつをかこみ
菊はかた車の子にもたせて月が暈から出る

もう菜のとうのびてゐるとくりやが夕日のかげ
ばらの芽に雨の中からの日がさす

肝崎多代

つばきの花、春が淡い黄のしべ二つこらむてゐる
遠い汽笛と近い汽笛と梅けき降る雨の暖し

庭石ぬらして春の雨ふるけふはうちにある
小鳥が南天の實に來てゐる寒明け

竹久清信

あられふらす雲のはれて日のさし夢の芽
しぐれてはれて松が一本月夜となる

小猫あげますと書いて草家の霜

倉本勤也

まるい山が家のすぐうしろのうす雪
松の雪に日は射しけふ國旗だしてよろし
赤い枕はづさすに眠りつづけてゐて雪の日

ちよつと出かけてきた埃はらうてゐる櫻のはなびら

鈴木單衣女

庄けあげて水きはにはちるものを
よるにふつたらしいやねにさくはな

猫柳、ときどき遊るバスは町へゆく
 一列のせて行つたあとに又一列雪がちらつく
 今朝水をまきある路驛にゆく夢は青づき
 たもととひらりひらりとおまつり
 池にふつて散つてゐる庭を通りおいとまする
 こころよい日は厨に立つてゐたりなど春の日白い
 月が池のまんなかになかにベエトツフエンを
 ふじをながめにししてにぎりめし白い
 失きな月 若葉の明暗
 はふきのとがある猫柳があるそんな句がある
 ちちの手には盃が小さいばんごはんにしてゐる
 月夜を火事消したポンプで歸つてゆく
 窓あかりを夜目にもつんだ雪をゆく
 日があたつて芽が出そうな櫻、土手をゆく
 此頃は煙突から煙が出て車外春雨
 山ひだくつきり残雪 あつて月が出ようとす
 童の顔が一つ一つ月夜であつて道岐れてゐる
 そごこと日だまりには夢も青くて山の學校
 のぼつて青葉の御堂そのたみ青さ句會する
 街でそよかせネクタイ迷んでゐる
 固い土わかれてゐてその力芽を出してゐる
 きみの頭もこんなに白くて春の夜宿の火鉢
 雨がふるさむい煙突が一本
 皆がひまあげてしまつてからはボハラの木秋晴れ
 しづかに煙突くるい息して春になる

森田和夫

廊下まがつて暗い廊下寒い足音がくる
日のあたる木立の冬をちらちらあるく
ふるさとへかへるバスに乗りこれから寒くなる景色
正月風よく空に吹かれてからすが三羽
教へられてお稲荷さんをまがると秋のものほしてある

水野田々詩

福本逸子

島々満潮に浮び雨ふるに濱の家々も
雪ふりやんでゐる暮るる前の雪野原かな
台所する音のふけてふりだした音が寒の雨
案山子も家へかえつてゐる山は雪
風がちらした木のはの夜がお月夜
母の子供のころからの柿の木に残つてゐる柿
曲りかどにゆきがある長い塀たづねてくる
風があめのあと野火のあとが萌えてゐる
山にはくつきりとにじの改札をでる切符の一枚
いちにちの疲れを灯に投げすてた手袋の表情
春が戸をゆるするほどな山の療院に静臥してゐる
つぎのあかるいひさしにねる
つぼみ、虫がきてかへつてゆく
一人ゆくしきりにさえづる林又一人ゆく
移りきてもう此子のいたづら雪とける
近づけばとびたつからすひろびる雪とける
月が月夜となりゆくに稲架かけ終へて歸る
去年がことしとなつたお宮の鳥居をいづる
霧があさ仕事にゆく
松の木のにほひいちにちはたらく

長谷部丁字路

平野榮一

案山子も家へかえつてゐる山は雪
風がちらした木のはの夜がお月夜
母の子供のころからの柿の木に残つてゐる柿
曲りかどにゆきがある長い塀たづねてくる
風があめのあと野火のあとが萌えてゐる
山にはくつきりとにじの改札をでる切符の一枚
いちにちの疲れを灯に投げすてた手袋の表情
春が戸をゆるするほどな山の療院に静臥してゐる
つぎのあかるいひさしにねる
つぼみ、虫がきてかへつてゆく
一人ゆくしきりにさえづる林又一人ゆく
移りきてもう此子のいたづら雪とける
近づけばとびたつからすひろびる雪とける
月が月夜となりゆくに稲架かけ終へて歸る
去年がことしとなつたお宮の鳥居をいづる
霧があさ仕事にゆく
松の木のにほひいちにちはたらく

栗田白夢

梁瀬阿羅與

風があめのあと野火のあとが萌えてゐる
山にはくつきりとにじの改札をでる切符の一枚
いちにちの疲れを灯に投げすてた手袋の表情
春が戸をゆるするほどな山の療院に静臥してゐる
つぎのあかるいひさしにねる
つぼみ、虫がきてかへつてゆく
一人ゆくしきりにさえづる林又一人ゆく
移りきてもう此子のいたづら雪とける
近づけばとびたつからすひろびる雪とける
月が月夜となりゆくに稲架かけ終へて歸る
去年がことしとなつたお宮の鳥居をいづる
霧があさ仕事にゆく
松の木のにほひいちにちはたらく

中野弘雄

水田草史郎

風があめのあと野火のあとが萌えてゐる
山にはくつきりとにじの改札をでる切符の一枚
いちにちの疲れを灯に投げすてた手袋の表情
春が戸をゆるするほどな山の療院に静臥してゐる
つぎのあかるいひさしにねる
つぼみ、虫がきてかへつてゆく
一人ゆくしきりにさえづる林又一人ゆく
移りきてもう此子のいたづら雪とける
近づけばとびたつからすひろびる雪とける
月が月夜となりゆくに稲架かけ終へて歸る
去年がことしとなつたお宮の鳥居をいづる
霧があさ仕事にゆく
松の木のにほひいちにちはたらく

廣田不知火

吉原三峽水

風があめのあと野火のあとが萌えてゐる
山にはくつきりとにじの改札をでる切符の一枚
いちにちの疲れを灯に投げすてた手袋の表情
春が戸をゆるするほどな山の療院に静臥してゐる
つぎのあかるいひさしにねる
つぼみ、虫がきてかへつてゆく
一人ゆくしきりにさえづる林又一人ゆく
移りきてもう此子のいたづら雪とける
近づけばとびたつからすひろびる雪とける
月が月夜となりゆくに稲架かけ終へて歸る
去年がことしとなつたお宮の鳥居をいづる
霧があさ仕事にゆく
松の木のにほひいちにちはたらく

中西國友

池沼源吉

風があめのあと野火のあとが萌えてゐる
山にはくつきりとにじの改札をでる切符の一枚
いちにちの疲れを灯に投げすてた手袋の表情
春が戸をゆるするほどな山の療院に静臥してゐる
つぎのあかるいひさしにねる
つぼみ、虫がきてかへつてゆく
一人ゆくしきりにさえづる林又一人ゆく
移りきてもう此子のいたづら雪とける
近づけばとびたつからすひろびる雪とける
月が月夜となりゆくに稲架かけ終へて歸る
去年がことしとなつたお宮の鳥居をいづる
霧があさ仕事にゆく
松の木のにほひいちにちはたらく

石井洋音

田中無絃

風があめのあと野火のあとが萌えてゐる
山にはくつきりとにじの改札をでる切符の一枚
いちにちの疲れを灯に投げすてた手袋の表情
春が戸をゆるするほどな山の療院に静臥してゐる
つぎのあかるいひさしにねる
つぼみ、虫がきてかへつてゆく
一人ゆくしきりにさえづる林又一人ゆく
移りきてもう此子のいたづら雪とける
近づけばとびたつからすひろびる雪とける
月が月夜となりゆくに稲架かけ終へて歸る
去年がことしとなつたお宮の鳥居をいづる
霧があさ仕事にゆく
松の木のにほひいちにちはたらく

明石青露子

忙がしいといふことがたのしくて水飲む水が冬
暖かさも三月となつた口笛
竹屋さん竹の話と残雪よほどけた山脈
雪山遠くあり朝の一步一步日をおうてゆく
みぞれたり青空みせたりピルの屋上の星條旗です
もぐつてあらぬ方へ浮いて出てゐる海鳥と能登の雪
今朝は雪の野山を遠くに冬木つらなり
しろかねのつきよのうらやまへとほるほそみち
子供家にゐる雨のふる八ツ手大きな葉
舟が向ふ岸こちらにへさきむけてきて雪の降る
椿の花に雪のふる朝の女の子が産れてゐる
やや子の寢息のふかぶかと雪積る
客とあり鶏はなしあり梅少しちりてあり
木の芽に雨の明るさはしづくしてきてマンドリン
墓道を行く霜どけの土少少し芽ばえ
よばれに來てひるかゝの雪になる南天の實
朝はたき火の人影水にうつりあちらにも刈つてゐる
河は満水の底の石雪もつ山の見えてゐる
右手を胸に吊つて病院がよの夢の芽のしづかな冬晴れ
坑をあがればさむい空があけてゐる松の木
小舟なら冬なごの渚でなほしてゐる船大工さん
網干場からの海の遠山のそこの白雲もう夏
櫻ちよつと咲いた投票所から出てくるはいつて行く
流れにそうてひとり春寒の街をはなれ
枝に春がきて雲がとまつてゐる

安達 俊郎

杉原 明雄

高橋 政二

桑原 愚村

雨宮 勝

吉村しをり

永田 杏平

増田折莖子

平位 青水

長山林二郎

吉川 群孤

中村未知男

森田 松枝

空は電線、枯枝と枯枝と組んでゐる
桑の枝葉つるして霰と雨のいちにち
雪からでて家々こよひ月がまんまる
そろへてスリツバの男もの女ものちらほらゆき
馬に馬のゐてうごく柵のうち冬のくも
このごろつむでもない雪のこわれた肺で生きてゐる
木の白い花がふるさとくれると月夜
みづがこほつてゐる星がふきとばされてゐる
やねのゆきがすべる音のむづかしい話である
みぞれとなつて暮れて障子はりを止めた
影に雪をおきしんかんと凍つてゐる
還つてきてゐるりの火で巻いてすふたばこで
江戸へのぼる昔の句とて伊吹のかたち今朝ぬくこい
蔽からとつて山ぶどうの甘すつばいのも秋
葉のふかぐつはきこころよし雪しろし
ゆくにもかへるにも一筋道の風のふみきりばん
おほりの蓮の葉の風俣で通る
そとにふる雨が春聴衆の中で私で
ちちやぎがねてゐるつくしんぼう
オフイス掃除して少女たちコスモスと詩集と朝
ボウツトになんにもないプラットホームの空にある星
藤棚さいいてゐて鍛冶屋さんふいで
廂にほろづき一れんさげて屋根の雪
一日一日草のびるとなりも草をとつてゐる
摘みてつみあましたる草の指に匂ふ春である

福間やぶ子

加賀谷 宏

小野勝次郎

前田むつを

小澤 法雄

吉岡 正泰

小山 銀鳥

西本 イチ

山川 白朝

中村いちろう

川口 水子

佐藤 コト

一日ひなたの石となつてゐる
 月があかるくほせてゐる
 家とつた跡畑にしてから日ざかりのいつも蝶々
 朝の涼しさは合所の火吹竹、貧乏してゐる
 よきみのり水をおとす水の音です
 どつこも稻こぐ音のつきよの牛ごやの牛
 朝、山に山のかげが初夏です
 雨の通つた山があり日紅の眞赤な藁家があり
 窓が夕焼してゐる學校の小使さん
 犬が遠くで啼き月の近くでまた啼き
 山羊が一匹ゐて暮れると三日月さん
 白波の海はもう秋であるかぼちや島
 いつも今日も石工さん石切つて秋の日ざし
 枯木のその道すすきのこの道ゆく小さな池青空を
 とぎ水がしづかににこしてゆく流れが秋
 竹の中すぐしりぞく日がさしてゐる、せきれい
 雪つけた子供かへつてきてひるどき
 雪の日風呂敷からだし、て賣るをさなし
 山に來て湖見ゆるちよつと一ぶくしてから麥まき
 ひよつこり生きて還つて昔からのじようぶな時計
 水仙一りん客まつてゐる咲いてゐる
 牛の子つれて通る霜のまだ明けらない
 雲のながれて山羊のなく夕べは私ひとり
 雪ふかいころのふるさとの大根のあぢとそうして
 雨の音も春になる枝で鳴きつづける

申村 秋夫
 東 草二郎
 下田 夢
 山根志乃竹
 永井喜太郎
 木滑 洋子
 小川 環
 加藤 白水境
 杉本伊之助
 田中 白路
 吉村 深泉
 渡邊無患子
 永田 孝子
 平賀 夕星
 松岡 弘豊

大根ツ葉が干されて笹にしぐれる
 菓箱 白い子兔もゐて菊の花咲く
 肥車にお飾りつけて元日内に居る
 夕日のいろそめし雪の水車の音であり
 朝月芽をもつてぬれてゐる
 出坑もう間もあるまいうそどり
 大根きごむ音も正月のこたつふとん出來た
 嫁もらふ話はなしかけられてゐる窓畑、しも
 ポプラ芽を吹く三日月がかかつて
 春雨 止んでゐる島一めぐりする
 三月小雨降る中を松露買ひに行く
 峠のぼつてきて青空である石彫る音である
 汽笛山々にこたまして雪山それぞれのかたち
 枯草に降る雨が牛小屋に鳴いてゐる牛
 いわし雲に日は入り脱穀機ころよいリズム
 雪はしづくとなる音がわたしのトタン屋根
 枯れ草山から芽を出したかげろう
 はるが山ふところ二三軒がくれてくるやね
 ふるやうに散つてくる焚火してゐる
 紅葉してゐる木もあつて石垣雨にぬれてゐる
 月が澄んで二階の人本讀んでゐる
 夕月川にうつり子山羊を連れにゆく
 吐く息の白くなつてゐる一列勵行
 はれて大きな富士をおきパスが道の遠くから來る
 復員カード手に持ち日本の朝が晴れたあまい煙草である

三島 秀夫
 齋藤晴々子
 揚井 乍
 鎌田 一相
 酒井 健之
 出口 不爭
 林 喬風
 平位 阿木
 榎野香林洞
 井倉 廣志
 崩場 泰山
 山 昭平
 酒井久和灯
 佐藤 吟雨
 杉原 明雄
 鎌倉白羊城
 並木 縁朗
 田口 十火
 下山 尙
 下山 良
 下山 敏郎
 下山 仁
 鹿俣 西哉
 久保田 敬一
 海堀 鬼胎

一軒家の木蓮さいた道の月夜
 正月晴れた乞食である
 思うてゆくにふかれてゆくに吾があしあと
 垣の外のかれくさに風が強すぎる
 段々鳥夢の穂その上松林の中の屋根
 すすきのすがれ晝月で
 子供の作つた鳥おとして雨にぬれてゐます
 小屋の荒壁梅の枝さいてゐる
 何をくよくよなどと歌つて野の道あるく
 水で米つく音である朝がまだくらく
 風さげて木が芽ぶく風がある
 ひばりなく病人ねてゐるだけ
 オフィスの廣さ寒く二人残つて火鉢の灰
 春さむく悪いからすも啼かずに逝かれた
 電線山を横切つてゐるこたまする
 繪本の畫が春である風がめくつてゐる
 娘さん窓のカーテンひらひらする風が春
 お話を知らぬおとさんで子等よ冬の夜
 紙の飛行機とばすてふてふもとんである
 買つてもらうた赤いリングでリングの歌うたつてゐる
 水に洗んだかけた茶わんで土橋夕日する
 鳥に吹き梅にふき毎日ふいてゐる
 木にふりたんぼにふる雨をふみきりばん
 行きにみて歸りにみて仔馬顔だしてゐる春夕日
 牛のゆつくりゆつくり歩く長い野の道春

石川 燧己	夢を踏みたただ青空一人にて	大町 桃水
齋藤第九人	朝大きくいきを吸い白い山そり引いてゆく	佐藤竹仙果
千葉吐男	だまつて夢ふんでゐる赤い手袋うしろ手	笹村 國雄
淺野 一男	ふる雪もうぬかるんで牛乳屋で通る	立田 道夫
平松 緑子	凍りついたふんすい影に浮浪兒らしい影で	小林 俊夫
積木 晃楓	ぞうすいをふきふき木枯きいてゐる	森景 かん郎
富田南龍子	かます貢うた男花束かかえた女雪はれて通る	高橋 松二
鈴木 土々	子ども笑顔で帯結んでもらつて冬朝	伊藤 耕樹
木下 思	葉夢雨はれてゆく明るさになつてゆく	甘家 一踏
菅原文作	士も春の働のひかりをとく	田中 敬三
鷺見 泰	女がかへつて雪空さざんか落ちてゐる	小林 晃夫
武田まこと	夕立のあとの荷車ひびかして通る	三ツ井 龍雄
田邊 純夫	歩くことおこたらないで歩く秋になる宵菜	都築 紫山
小島鬼魂郎	百日草百日さいてゐたのかかれてゐる	岡村 健聰齋
中村 昌二	川に來て遊ぶ子供もみぢ散る土手に子供	星島 芳子
三井 靜峯	月を暗くした地球の影風が出てゐる	安達 米太郎
島津十四生	雨あしはやい雨がきてあがつたさくらの實	長谷川 勝好
松本 喜一	子どもはやくおきてかまどに火あかあかと霜	神山 かぎり
岸田谷川水	焼跡夢がりつばに實つて夏の雲出てゐる	飯田 三茶
安藤 香水	今年おわる、天上界の星が落ちてきた	和田 忠雄
吉田 青	涙のその夜も雀がないてあけてゐる	山内 春溪
星野あきら	そつと通つた風に豆の葉の裏表	伊藤 ふさの
梅木 成敏	妙義にひつたり横川は短日このころ	伊東 寸圭夫
山添 是尊	日がさ、夕日のみづうみ青いといふばかり	加藤 運兒
守護 緑朗	呼ばれていきやすかと春夢の花ざかり	増井 宏之

枝々芽をもち靜かにながれる雲である
 雨が茅根にしみいるばかり木の芽
 いろいろの木のかたち雪かかり夜あけてきた
 引揚げてきて一枚の死亡診断書となつて櫻散る
 木の芽や強壯劑でものんでゐる
 歸ると靴をぬぐ炭火匂つてゐる
 雨が道に音をたててふる夜
 ならんでみんな一年生麥ののびる青い空
 明日うえる田の水まんまん月になる
 レールが聞へのびてゐて愛してゐる春
 久しぶりの配給の魚の四五枚梅に干してある
 風が海から空から馬ひいて通る春
 少女背の子に梅がさいてゐる
 夕づきや手まりをつく
 音たてて火が燃え辨當ひろげてゐる
 星がめぶいて匂つてゐる
 たれも知らないしづかなできごと木が芽をもつ
 湯壺洗つてゐる女が裸で更けて春の夜
 ちちのはるのがかなしくてさくらさいてゐる
 すでにことされし足のぬくみをおむつかへてやる
 こころすなほに繩なつてゐるいろりの火のいろ
 ふきのと蟹があそんでゐる
 さくらさいてゐて濕線しがちな公衆電話で
 すいせん井戸端の水に活けて留守である
 あたたかく笹のぬれてふる

小松香向射
 小松田南苑子
 田口木吾
 池邊象外子
 渡部紀代子
 山本杏子
 竹澤しげる
 三好茶丘
 齋藤仁
 櫻井明
 太田節子
 村越庄吉
 鈴木昇
 丸山ゆうじ
 小谷秀雄
 五十嵐みい
 菅原西人
 佐藤緑雨
 松下千秋
 田中冴子
 永井郎南
 眞島兎眠草
 寺田夷平
 寺田山茶子
 近藤紫香

つばくら出入りするうまやの戸あけてある
 霜のある木をひいてゐる道端
 生れた日であるとも梅さく服にプレンかけてゐる
 生きてかへつてふるさと學校の梅がちる
 空がうごいてゐる春である土に立ち
 咲いてこぶしの木傘屋さんからかさ干してゐる
 せきれい尾をふりて鳴く水音の中に鳴く
 晝休みは榕を挿して娘さんもダンスの練習
 はたりとおちて椿の花がぬれてゐる
 頬のくづれそうそんな雰圍氣を炭を火にする
 内地も雪がふつてゐる遺骨抱いてゐる
 旗日の旗掲げる家をもたす梅のさく
 電話にかかり手が冷たい火のないストーブ
 芋の葉こんな所にもお祭の一軒
 豆の葉にそつといなごが今日お祭
 峠をこえて梅が咲いてゐる配達してくる
 洗面器に水くんで長雨はれた
 麥の穂こうして車ひいてゆくのが私
 鐘が還つた毎朝つきにゆく爺さん石ころ道
 雪つむ夜の荒壁のさむさをひとり
 夜が凍つてくるこえいかの聲が隣へもくる
 羅段から下げてきて焼いて白い赤い餅妹
 あかるく波紋がひろがつてまたしづくする
 ここでも春の色がとけてゐる一枚の繪である
 寒夜さしつらぬいた様な梢の月である

高橋幽摩
 佐竹久枝
 西田西雲
 桑田海老子
 飯野無花果
 栃本敏男
 鈴木梅宇人
 野口光
 岡田しづ子
 坂田與志夫
 鈴木作良
 夷石龍樹
 青木丘草
 藤井善三
 鶴岡邦彦
 大矢雄一郎
 坂野正徳
 井戸博美
 新村和也
 湯淺影外子
 青山さだ子
 加藤利枝
 藤見小夜子
 川島理一

牛が木をひくおひがんなかば
 梅見はひとりがいしそりを柔に打つ
 窓をたたく雪子供ばかりのこたつとしてゐる
 水鳥浮いてゐて雪が春が流れてゆく
 明けましてと豆の木などで炊いてゐる
 花がさびしくて一つ、てふてふがきてゐる
 空も海もしゆくせん門松
 南天の實のゆるらと夕日です
 水車よくまわつてゐて藪かげの柿の木
 かげおとす木も海もふゆはれ
 百日紅咲く道けふは寄り道して歸る
 ラヂオは討論會の豆殻パチパチ燃える
 溪流となる秋の日のさす碓氷にかかり
 逢ひたしと思ふ水仙の花また一つひらき
 もうぢき辭める人もゐて木蓮の下で一枚
 夕刊読んでしまつてまだ來ないバスで夕焼空
 バスを待つにも列である芽ぶいて柳
 村の正月しづかに暮れゆく波音にて
 母の梭の音のやうな冬の日のさびしい記憶
 父歸らぬ四人の幼さを爐端でわたしが今日の古稀
 焼けて残つた壁のつたもみぢではある
 月が出たばかり洗ひ終へたる馬に乗る
 朝は霧から日が出てくるパラツクの屋根
 せせらぎの青いものがいつまでも背くて暮れてゆく
 朝の焚火に集つた中のりんごを特つてゐる子

栗田千可志
 矢島川せみ
 廣橋 鋼一
 河邊 儒
 近藤 自青
 鍋島 次男
 藤井 靜夫
 坂本 秋郊
 岡垣 整明
 石原ゆき男
 小澤養心王
 辻村追鳥子
 松井 柳城
 殿木 敏子
 岸 月歩
 川口 芦雨
 畝木 茂彦
 日吉 單舟
 守屋詠三郎
 入江 功一
 近藤 紫水
 櫻井 紫村
 亀井 素苗
 櫻井 雨村
 色川 白帆

柿が赤くなり朝日に雨止んでゐる
 雀めつきりさむくなつてすずめとゐる
 驛の灯の明るさをふり返るまい風にむかひ行く
 うたは杜氏の唄いつか夜があけてゐて春
 砂濱すなに咲いて荒波よするところ
 高い煙突ひくい煙突暗くなつて
 仁王さまの足にもさす日となつて秋の日ざかり
 作られしみな白い光の毎日のお茶わんが一ぱい
 そつと手のうへのぬくとさたまこ
 はぜがまるまると太つてきて浦の草のくれない
 おそ咲きのあざみなんでもあつて無事に還つてゐる
 ここらにもジープが彼岸花咲いてゐる
 病院の壁がきいろくて夕日の糸瓜です
 淀の川原の青草枯草やや明けけわたり
 もうすぐ寒い冬がアスファルトの外燈である
 はぐが毎晩こがらし吹くみちをかへるのでお月さま
 新しい物干竿でものを干す秋
 きこの道のことは冬になる雨のふる日
 霜のこの道が橋までに目の丸出した一軒
 それから達者になつて日焼して行水する
 君たち電車賃もつて海へ行くそれだけの空
 青菜の下に散つてゐる葉が掃かれたまま
 石やの石に蝶々がきたり石を彫る
 お祭がくるうちの島が青くてみんな裸
 やねがめぶいてくる氣配灯をつけてひとり

兩角 良哉
 佐々木 黙
 吉岡 郁
 小野寺秀文
 三井不二雄
 猿田 好子
 藤田 豊
 山口 草露
 西本 吟兔
 尾畑豊舟人
 秋谷 照
 稻田 甲子
 小倉 健嗣
 丹羽 井峯
 前田 昭
 北田大林木
 井倉 松雨
 小澤 道雄
 後藤安喜貞
 伊東 俊二

青い屋根 (特選)

平松星童

霧のうらに日はのぼり農学校の青い屋根です
少女素足にすりつげ春寒い廊下の長さをまつすぐくる
姉妹でテニスしてゐる草のつゆかはくと草いきれする
らんぶにむらさきの石油を、空が日夜と夕焼けのあひだ
世の中のことにすこしわかりかけてきたふきのはろにがいのも
つばき、うみ、はく、らい、ほど、にあ、を、く
つばきおちてゐる鏡のなかの女がおびをとくので
枝と枝枝と枝くみあうてゐるしたをふたりしづかな、ゆく
あが理、性、竹林の雪のあを、しともあを、し
海にも雪のつむやうな夜はランプの下の白い猫
うまやつゆけくてぎんがもうあきである

句ふ木 (特選)

里井正子

こころさびしくてゐるりにどれか句ふ木ももえゐる
月のひかりの湯にとどきゆにしづめばあふれ
うみにいさりびのあかるすぎるほどにくらいよる
かざおとがおとしてゐる薬でみづおとがさがしてゐる薬で
かぜがふいてもほるのかぜか、いとろろすすつてゐる
くりやはるの日にひとほしたかれひのいろのしづかなる
洗ひあげてもちやわんの糸がぬれてゐる夜が雪つむ上のあめ
ゆきがはれると雪のはたけへきてからすなく正月
雪がふらない晩がすこし明るく戸口へおひる雪の段々
ゆきに木がびつたりとかかげする月夜

句會だより

・東京に「扉の動く日」といふ學生ばかりの句會が出来た。善知氏星童氏が幹事で渡邊さとの氏が顧問格、會場は五黄子氏のお住居の、澁谷道玄坂上、日本火災保険樓上で毎月十日に近い土曜日の午後開催される。
・鎌倉でも谷津の會とは別に、若い人が集る會が出来た。丁度層雲社のあとに星童氏が住ふことになつて寒雄六六子一雄氏等が時々集つて熱をあげてゐる。

・茨城縣日立に支部が出来た。鈴村氏が幹事、大雄院での句會にはいつも五人程集る。この會も若いはずらつとした人が多い。
・茨城縣の藤代町に紫村氏が中心に「せらぎ會」が出来た。會員は十八人程で、冊子「普門」を出してゐる。

・秋田縣では平鹿福地村に灰斗氏幹事で「銀竹會」仙北横澤村で粒三氏中心に十五人程の新しい句會が出来、角館では吾亦紅氏が熱心に新人を育ててをられる。その附近の同人達が發行してゐる元茶氏編集の「圓座」は十八號が出た。井先生の文章の他に吾亦紅氏が珍らしく書いてゐる。

・山口縣へ外地から碧松氏が歸還されたのを機會に句會が復活した。庭草氏が奔走

されたのである。柳井支部(幹事文友氏)麻郷支部(幹事碧松氏)と二つである。この他に徳山に雑草の會がある。これらの會の人達は舊參の人が多くて名をきくとなつかしい。下關には黎々火、冬二氏等の他に會員五六名あるのだが、まだ支部結成の機運にならない。

・福島縣梁川の波紋社で新人がぞくぞく出て此頃では冊子「波紋」も發行されるし有望である。波紋の印刷は美しくて藝術的で氣持がいい。

・九州方面は近頃さつぱりしづかになつてしまつた。個人的の通信は寄越されるがまとまらない。みな忙がしくて集る機會もないらしい。その中で阿蘇内牧や熊本や福岡では小會合が折々はある。佐賀には新句會が計畫されてゐる。

・鳥取縣の黒坂では草一氏が油がのりきつた感じで、志乃武氏も張合ひが出来て面白い句會になつた。倉吉からは有紀男氏が「風土句報」を月刊、自由律欄がある。

・岡山縣津山で鶴の會が復活して以前よりも盛である。「鶴」も月々刊行されてゐる。

・靜岡縣濱松の貴布彌の句會は今度雜誌「麥笛」を出した。悠夫氏と榮一氏の編集であつて、指導に卓二氏があたつてゐる。この句會は本當の新人ばかりでたのもしい。

・横濱のハマの會と鎌倉の谷津の會の會員は殆ど兩方に籍があるので當分の間、横濱と鎌倉と交互に催すことになつた。横濱は東横線の妙蓮寺、鎌倉は北かまくらの東慶寺で第二日曜午後が例會である。(七月は鎌倉)

・東京ビル人句會は地の理がいい爲益々人になる。土曜日の午後、勤めの歸りに集ることになつてゐる。日本橋中心で、集る人中に鳳車秋紅蓼さとの巴水樓棗人都影番紅花稻市農平一石路武二夢道氏等の顔があつて随分豪華な句會である。會場は室町三丁目不動ビル銀行重役室、七月は二十日の筈である。

・名古屋へ大阪から廣勝氏が轉居された。其うち城の會が復活する。秀明氏が關係してゐる「週刊名古屋」では自由律俳句を掲載してゐる。名古屋附近の人は寄稿されたい。又岐阜那加町に、大鹽白々氏が編輯で共同タイムスがあり、やはり自由律句が掲載されてゐる。

・京都では菊の會が興ると共に、泉の會が清新の息吹をはじめた。河原町四條上ル新日本生命樓上で第二土曜の午後催される。菊の會は祇園の「土井」が眞葛原の菊溪亭で大抵の日曜日に句會がある。木衣樓氏の編輯菊の機關誌「圓窓」は第四號が出来た。井師の文と句の他に夏積氏の文章がある。

・大阪港の會は例の福松商會を會場に復活

する。神戸でも楠の會が毎月催されてゐる。

・小澤武二氏が今度東京から千葉縣へ移られた。さうして層雲支部として房總自由律俳句集團を作られたと共に柏俳句教室をも設けられた。教室の規約は、指導は主として武二氏、通信で指導する、毎月一回三十句迄批評添削をうけられる、費一ヶ月二十圓、教室所在地は千葉縣柏町一四五小澤氏方。

・次號から此欄に各地句會通信を載せたい

讀書くらぶだより

・住山久二(扇屋半平)氏の遺稿句集が刊行された。井泉水先生が選抄と編集をされたので層雲句集に準ずるものである。且つ故人の親友の某氏が奉任的に印刷製本されたので今の時代によくこんな立派な本が出来たものだと思ふやうな本である。表紙は「冬扇」題字も装幀も井先生がなされた。會員本五拾圓。讀書くらぶ發賣の書籍の定價は次のやうに改訂されたからお含みを乞ふ。

「青葉若葉」「私の綴り方」「千里行」「金沙子」「芭蕉さま」(何れも會員本、著者自署)各貳拾圓。(送料壹圓貳拾錢)

・京都の層雲社では當分は書籍の取次はしないので、層雲社發行の書籍はすべて「讀書くらぶ」で取扱ふ。

神奈川縣大船町山之内

大泉園内 讀書くらぶ

振替東京三〇〇一七番

● 京都からの第一號である。編集の上では内容は従来通りで、たゞ組方を少し變えた。計畫では、本號からページを増きうと思つてゐたのだが、三十二頁に限定されたので致方なかつた。全部六號で組んだ。

● 表紙は、今迄にも井先生の隨筆集の裝幀をされたことのある小玉邦彦氏である。

● 井泉水先生は今京都に来てをられる。眞葛原の菊溪亭で選句したり原稿を書いたりしてをられる。近所に木衣樓さんの宅があり三度々々の食事を運ぶ。京都の同人が毎日話をきくにゆく以前先生が、京都に住んでをられた頃は、東京の層雲社へ毎月往復されたものだつた。原稿を京都でお書きになつて、それをもつて東京に行き、印刷所へ渡して、校正をしてまた京都へお歸りになる、そんな風だつた。

今度は先生が鎌倉で、層雲社が京都なので、京都へ来てをられるわけである。

● 菊溪亭の近くに大雅堂の跡や芭蕉堂があり青葉に埋もれてゐる。先生の机の前の木立に山の小鳥がきて鳴く。木衣樓さんの話では郭公も鳴くさうである。

● 去年は約束ばかりをして、いところ果せなかつたが、こんどの印刷所は好意をもつてやつてくれるし、今日も出た校正を見ると良心的に組んでくれてゐて氣持が好い。こんな時世だが層雲は順調に出してゆけさうなのでありがたい。

● 七月の層雲社句會は第三日曜(二十日)午後、層雲社の隣の光明院で催す。所は京阪電車を鳥羽街道驛で下りて陶磁器試験所の所を上り突當りの寺である。

● A會員に配る會報第二號には井先生の「層雲を一つ精神團體に」「層雲人素描」他會員動靜等が載せてある。

投稿規定

俳句 荻原井泉水選 編集部選

● 投稿は誰でも自由

● 一人 一月 一稿

● 句數は一般は五句會員Bは十句Aは三十句迄

● 用紙は半紙二ツ切大のもの

● 一枚に五句迄楷書清記

● 二枚以上は左上カドを綴る

● 句稿の添削を望む方には内規がある照會ありたく

文章 編集部選

● 評論 研究 隨想等

俳句會報

● なるべく會の直後に詠草に會の報告文を添える

● 俳句會報は層雲社に保存しておきます

● 投稿に私信や用件を同封されても差支えない

締切 毎月十五日

投稿先 層雲社編集部

層雲 第四〇六號

昭和廿二年六月廿五日印刷納本
昭和廿二年七月一日發行

定價 一部 十圓

(送二、二〇)

前金で半年分以上お拂込下さい

何月號よりと御指定下さい

御轉居の際は發送部迄御報せ下さい

神奈川縣大船町山之内(龍洞)

主宰 荻原井泉水

編集兼 伊東俊二

發行人 伊東俊二

京都市柳馬場四條上ル

印刷人 竹内貴美

京都市柳馬場四條上ル

印刷所 竹内萬聚堂

京都市東山區本町十五丁目

發行所 層雲社

振替京都八一七八番

東京都千代田區淡路町二ノ九

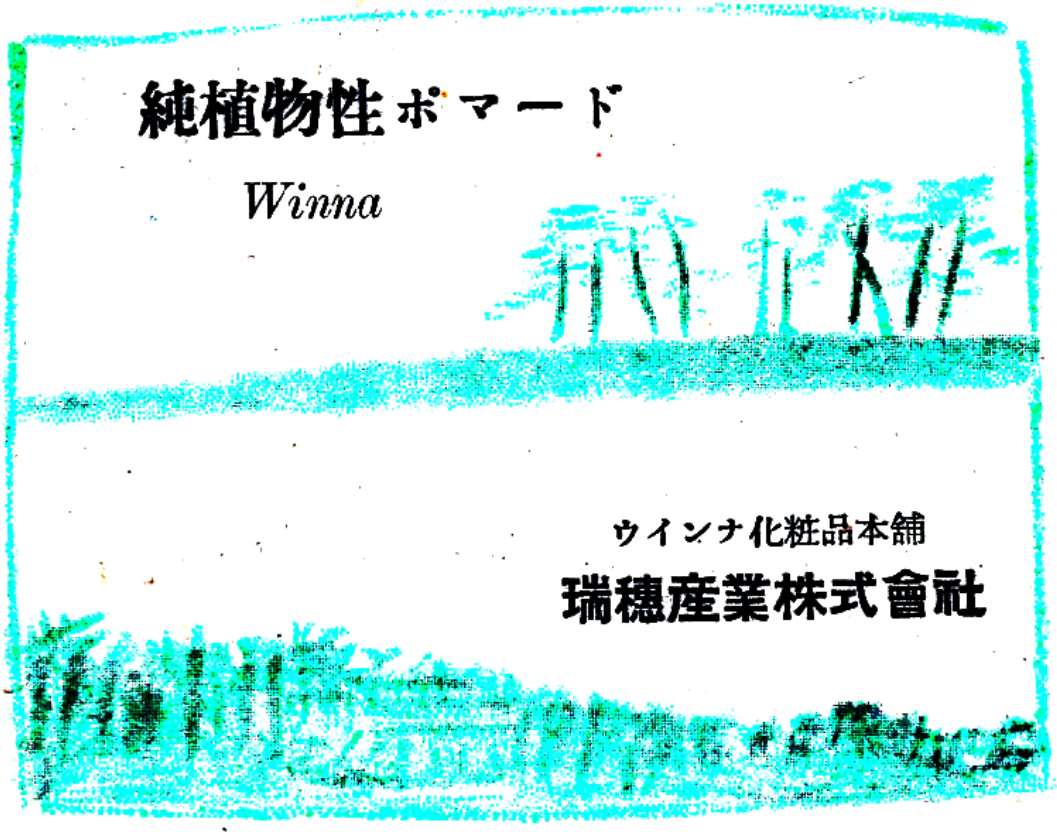
配給元 日本出版配給株式會社

層
雲

第三十五卷

第一號

昭和廿二年六月廿五日
昭和廿二年七月一日(毎月一回一日)發行
印刷納本



定價 拾 圓